

**世話好きで可愛いJK3姉妹だったら、  
おうちで甘えてもいいですか？**

はむばね

---



ファンタジア文庫

2910



世話好きで可愛いJK3姉妹だったら、  
おうちで甘えてもいいですか？

Sewazuki de  
Kawaii JK 3Shimai  
Dattara,  
Uchi de Amaetemo  
Iidesuka?

はむばね

イラスト TwinBox

プロローグ 神と深酔いと出会いと女子中高生と

「貴方が神ですか？」

そんな風に聞かれた時、人はどう答えるか。

は？ と聞き返す。いえ違います、と素で返す。はいそうです、とネタで返す。

人によって様々だろうが、今回その問いかけを受けた当人である人見春輝の答えは。

「……また？」

で、あった。

なぜならば、そう聞かれたのが今夜既に三回目だったためである。

春輝は、ここ十数分のことを思い出す。

「ういっく……はーチクシヨー！ 行きたかったぞ小枝ちゃんのトークライブ！」

中小IT企業に勤める社畜である春輝はこの日の会社帰り、千鳥足で空に向かってそんな言葉を叫んでいた。今日は本来、新進気鋭の女性声優・葛巻小枝のトークライブに参加する予定だったのだ。春輝は彼女の新人時代からのファンであり、今日も最前列の席で見

守る……はずだったのに。

「よりにもよって今日止まりやがるかよ、あの糞システム……!」

自分が担当するシステムに障害が発生してしまえば、エンジニアとしては復旧を優先せざるをえない。結局障害対応は長時間に及び、退勤する頃にはトークライブなどとつくと終演している時間だった。ヤケ酒を呷るくらい許されても良いだろう。

「つと……やべえ、流石に飲みすぎたか……」

しかし足がもつれて転びそうになるに至り、少しだけ自省する。

「ちよつと休んでくか……」

酔い覚ましがてら、春輝はちよつど通りかかった公園へと足を踏み入れた。割と大きめの公園で、あちらこちらに人の姿が見られる。その中には、カプルの割合も多かった。

「はっ……三次に興味なんてねえわ……」

齢二十七にして独り身、現在彼女ナシの男は、負け惜しみ気味に吐き捨てながらベンチに腰を下ろした。春先の風はまだ少し冷たいが、酔いで火照った身体にはちよつどいい。

「こういう時は、小枝ちゃんの歌を聴くに限る……」

スマホを取り出し、音楽プレイヤーアプリを起動。「小枝ちゃん」と表示されているフォルダを開く。確な楽しみの無い日々の中で、彼女の歌声だけが春輝の癒やしであった。

「はあ……なんかいいことねーかな……アニメみたいな、ビックリするような……」

項垂れながら実に疲れた社畜オタクらしい眩きを漏らし、スマホに接続したイヤホンに耳に――付けようとした、その直前であった。

「あの……お兄さんが、神……ですか……?」

そんな風に、話しかけられたのは。

「……は?」

呆けた声と共に、春輝はイヤホンを持った手を停止させて顔を上げる。

目の前に、制服姿の少女が立っていた。あどけなさが多分に残るその顔立ちから、中学生くらいかと思われる。肩辺りまで伸びた髪は、黒のストレート。所在なげに小柄な体軀を揺らす様が、何かに怯える小動物の姿を彷彿とさせた。

「えっ、と……? 今の、俺に言ったの……?」

彼女の大きな目は間違いなく春輝に向けられており、その可能性が高いのだろうとは思ったが。そう、問い返さずにはいられなかった。

「……うん」

果たして、少女は俯きがちなながらもハッキリと頷いた。

(えっ、何、神? 宗教勧誘か何か? いや、だとしても「神ですか?」はおかしいだろ。

なんだ、そういう遊び？ まさか、俺から何かしらのオーラでも出てるのか？  
突然の事態に混乱する頭の中で、そんなことを考える。

「……？」

黙り込んだ春輝に疑問を覚えたのか、少女が首を傾げた。

「もしかして……神じゃ、ない？」

「う、うん、たぶん神ではない……と、思うけど……」

尋ねてくる少女へと、曖昧に頷く。

「そっか……ごめんなさい、人違いでした」

すると少女はペコリと頭を下げた後、踵を返して走り去ってしまった。

最後に垣間見えた表情に、どこか安堵したような霧閉気があったのはなぜなのか。

「な、なんだったんだ……？」

少女の背中を呆然と見送りながら、呟く。

「酔っ払いつぎで見えた幻覚とかじゃないよな……？ ……もうちょい休んでくか」

幻覚が見える程に泥酔している可能性も一応考慮し、春輝はベンチに腰を据え直した。

「小枝ちゃんの曲……は、今はやめとくか……」

なんとなく氣勢を削がれ、ぼんやりとスマホで適当なまとめサイトを見ること数分。

「やつほー、その一人で寂しそうなオニーサン。キミが神なのかな？」

先程とは違う声で同じ質問を投げかけられて、春輝は再び顔を上げた。

今度は、高校生くらいだろうか。明るいブラウンのミディアムヘア、着崩した制服に濃いめのメイク、初対面なのにやたら親しげな雰囲気……といった点から、春輝の脳裏に『ギャル』という単語が連想された。先程の少女は『可愛い』としか形容しようがなかったが、こちらは『美人』と称するべきだろう。

「いや、違うけど……」

二度目ともなれば先程よりは幾分混乱も少なく、春輝はとりあえず否定を返した。

「あ、そなの？」

すると、少女はぱちくりと目を瞬かせる。

そんな仕草は、最初の印象より少し幼く見えた。

「ごめんごめん、じゃあ人違いだ」

片手を手刀状にして、軽い調子で謝罪する少女。

「そんじゃね、オニーサン」

ウインク一つ、手を振りながら去っていった。

「……流行ってるのか？ それとも、この周辺には神が出没するって噂でもあるのか？」

独りごちるも、勿論誰からも答えなど返ってこない。

「最近の若い子のことはわからんなあ……」

だいぶオッサン臭い匂きが漏れた。

「……なんか、むしろ酔いが余計に回ってきたような気すらするな」

混乱が泥酔と混じり合い、まだ休んでいく必要を感じる春輝であった。

そして、現在。

——貴方が神ですか？

三回目に声をかけてきたのも、制服姿の少女であった。

今までの二人と比べれば、随分大人びた雰囲気纏っている。最初の少女が子供体型、二人目の少女が比較的スレンダーだったのに対して、彼女は身体の膨らみも「大人」な感じだ。腰にまで届く真っ直ぐな黒髪も手伝って、見る者に清楚な印象を抱かせる。少しタレ気味の優しそうな目の中心で、その瞳が不安そうに揺れていた。

……と、どうか。

「……小桜さん？」

今回は、春輝の知っている顔だった。



小桜伊織。春輝が勤める会社でバイトをしている女子高生である。

「……えっ、人見さん?」

伊織もようやく相手が春輝であることを認識したらしく、驚いた顔となった。

「そんな、人見さんが神……?」

次いでその表情が、疑問と気まずさの入り混じったようなものとなる。

「でも、知らない人よりは安心かも……それに私、人見さんなら……でもでも、こんな形でなんて……って、そんなこと言ってる場合じゃないよね……」

何やら、ブツブツと呟きながら葛藤している様子だが。

「あのさ、小桜さん」

春輝は、告げなければならなかった。

「俺、神じゃないんだけど」

過去二回と、同じ内容を。

俺、神じゃないんだけど。こんな言葉を口にする日が来るとは思ってもみなかった。

「えっ、そうなんですか!」

割とあっさり納得してくれた先の二人と違い、なぜか伊織は驚愕の表情を浮かべる。「逆に、俺のどこに神要素があると思ったの……?」

「いえ、その、人見さんは優しいので、そういうこともあるかと……」

「はい……?」

優しいと、人は神になるというのか。初めて聞く学説であった。

「ごめん、ちょっと説明してもらっていいかな? 急に、神とか言われてもさ……」

「そ、そうですね……!」

ようやくそこに思い至ったのか、伊織は何度も頷く。

「実は私たち、神待ちで………あっ!」

そして話し始めた途端、「しまった」といった風に自分の口を押さえた。

「神待ち……?」

その単語は、春輝も聞いたことがあった。いわゆる家出少女が、泊めてくれる人を掲示板などで探すこと。『救いの手を差し伸べてくれる』という意味で、泊めてくれる相手を

『神』と称するのだとか。それだけならば、親切な人もいるものだという話で済むのだが

……実際のところ、『神』のほとんどは男性であり。そういう行為が前提であると聞く。

「ち、違うんですっ!」

まだ春輝は何も言っていないのに、伊織が力強く否定の言葉を発した。

「私、処女なので!」

「……………は、はい？」

続いた突然のカミングアウトに、春輝の目が点になる。

「ま、間違えました！」

公園のどこか頼りない照明の下でも、彼女の顔が赤く染まるのがハッキリわかった。

「いえ処女は処女なんですけども、同時に神待ち処女でもあると言いますか！これが初犯で！いや、初犯の時点で駄目なんですけどまだ未遂っていうか！別にいつもこういうことをしてるわけじゃなくて、止むに止まれぬ事情がありまして！」

「わ、わかった、わかったから、ちよつと落ち着いて」

喋りながら吐息が感じられる程の距離まで迫ってきた伊織の肩を、そつと押し返す。

「あつ、あつ、すみません……！」

カツと更に顔を赤くし、伊織は勢いよく上体を反らした。

「ええと……それで、その『神』と俺を間違えたと？」

「はい……この公園で待ち合わせしてるんですけど、思ったより広くて……もつと細かい場所を決めたり特徴を教えてもらったりしておくべきだったと、反省しきりです……」

トーンダウンした声で、伊織はコクリと頷く。初歩的と思われるミスをしている辺り、確かにこの手のことに慣れているわけではなさそうだ。

（しかし、つーことは今夜この公園だけで三人も『神待ち』の女の子がいるってことかよ

……しかも、あんな小さい子まで……世も末だな……）

ほんやりと先の二人のことを思い出し、少し暗澹たる気持ちとなる。

「じゃあ、君と待ち合わせしてる人は知り合いつてわけじゃないんだな？」

そんな気分を表に出さないよう注意しながら、伊織に確認。

「はい、顔どころか本名も知りません。ネット上でやり取りをしただけです……」

「そっか……」

ふう、と春輝は小さく息を吐いた。

先程伊織は春輝のことを「優しい」と称したが、春輝自身は自分のことを少しもそんな風に思っていない。むしろ、極度の面倒くさがり屋かつ事なかれ主義であると自負していた。気にはなったが、彼女の言う『止むに止まれぬ事情』とやらを尋ねなかったのもそのためである。厄介事の気配がしない。

が、しかし。ここで知り合いの少女を放り出し、今夜気持ちよく眠れる程に冷たい人間でもなかった。というか、気になって眠れなくなってしまうこと請け合いだ。それは、優しさというよりは気の小ささゆえなのだが……それはともかく。

（さりげなく……そう、ラブコメ作品で主人公とヒロインの距離が縮まるようなイベント

を裏から演出する友人キャラの如きさりげなさで……」

内心で、そんなことを呟きながら。

「ああ、それじゃあさ」

春輝は、いかにも今思い付きましたとばかりの口調で切り出す。

「とりあえず今日のところは、ウチに泊まれば？」

何気ない風を装ってはいるが、内心では結構ドキドキしていた。

「えっと……そう言っていただけるのは大変ありがたいのですが……」

それに対して伊織は視線を泳がせ、口調も大変歯切れが悪い。

（あれ、俺ってもしかしてあんまり信用されてない……？）

同僚として多少は信頼関係を築けていると思っていたので、若干落ち込む春輝。

「ウチ、結構部屋余ってるしさ。知り合いの方が安心出来るだろ？」

少し早口で、言い訳がましくそんな言葉を付け足す。

（つて、これじゃむしろ下心があるみたいじゃねえか……！）

背中を、変な汗が流れていった。

「その、私、まだ人見さんに事情を全部話していなくて……」

「あ、それは言いたくないなら別に……」

「いえ、そういうことではなくて……」

春輝と伊織が、お互いにモニョモニョした感じで会話していたところ。

「お姉ー。神、こっちにはいなかったよー」

「イオ姉、こっちもダメだった……」

横合いから、そんな声が聞こえてきた。

春輝と伊織、同時にそちらへと顔を向ける。

「あつ、さっきの人……」

「おー、さっきはごめんねー。お姉、そのオニーサンは神じゃないってさー」

幼い少女が春輝を指差し、それより少し年上だろう少女がピッと手で敬礼してきた。

「あつこら白亜！ 人を指差しちゃ駄目でしょ！ 露華も、ちゃんと敬語使いなさい！」

二人へと、伊織が「めっ」と指を立てて説教する。

「あれ……？ 君ら、知り合いなの……？」

思わぬ展開に、春輝は目を瞬かせる。

（ていうか、『お姉』に『イオ姉』って……）

片や、その幼さゆえ。片や、濃いめのメイクゆえ。今まで気付かなかったが、こうして三人で並んでいると彼女たちの顔立ちがどこか似ているものであることがわかる。

「あ、はい。私たち、姉妹で」

果たして、伊織が口にした言葉は春輝の予想していたものであった。

「えと、というか人見さんの方こそ、妹たちをご存じなんですか……?」

「ああ、さつきちよつとな……」

ここに来て、春輝の中で線が繋がった気がした。

『三人の神待ち』がいたんじゃなくて、『三人で神待ち』してたわけか……)

先程、伊織が「私たち、神待ちで」と言っていたことにも今更ながらに思い至る。

そして、伊織の歯切れが悪かった理由もなんとなく察した。

「つまり、小桜さんは三人で泊まれる場所を探してるわけか」

「はい……掲示板の方とはそれで合意が取れているのですが、流石に人見さんにとって知り合いでも何でもない妹たちまでお世話になるのは……」

確かに、普段であれば春輝も知らない相手を家に泊めることを躊躇したであろう。しかし、今更ここで放り出してはやはり目覚めが悪い。まして、少なくとも一人は知り合いなのだ。それに、伊織の妹なのであれば悪い子ではないのだろうという気もした。

(ははっ……なんだか、ラブコメみたいな状況じゃなか。こういう時、主人公なら……)

そして、何より……今の春輝は、酒によってだいぶ気が大きくなっていたので。

「構わねえ、三人まとめて泊まってけ！」

胸をドンと叩いて、そう宣言したのであった。

「い、いいんですか……?」

「おー！ オニーサン、太っ腹だねー！」

「あ、ありがとう……」

きよしゆく、かんき  
 恐縮、歓喜、当惑。三人、それぞれ別々の感情をその顔に浮かべる。

もしもこの日、春輝に残業が発生していなければ。ヤケ酒が入っていなければ。公園で休んでいこうとしなければ。伊織に話しかけられる前に帰っていれば。

様々なifを超えて、この夜に春輝は三人の少女を家に招くことになった。

あるいはそれは、運命と呼ぶべきものだったのかもしれない。

彼女たちの存在によって、自分の生活が大きく変わることを。

この出会いが、『アニメみたいに、ビックリするような』日々の始まりであったことを。

この時の春輝は、まだ知らない。

## 第1章 社畜と二日酔いと味噌汁と新しい日々と

「起きて……お兄さん、朝だよ」

「んんっ……？」

ゆさゆさと身体を揺すられる感覚に、春輝の意識はゆっくりと浮上してきた。

「うげっ、頭いってえ……」

酷い頭痛を感じる。露骨な二日酔いだった。

が、これについてはさして珍しいことではない。むしろ、仕事の疲れや愚痴を酒で誤魔化す傾向にある春輝にとつては慣れ親しんだ感覚であるとさえ言える。

いつもと違うのは、二点。

一つは、トントントントン……と、包丁でまな板を叩くような音が聞こえてくること。

それから、もう一つは。

「……起きた？」

目を開けた途端に、見慣れぬ少女の顔が視界に飛び込んできたということである。

「え、あれ？ ……は？」

脳の処理が追いつかず、春輝は目を白黒させた。

(夢……？ それとも、ついに二次元の世界に飛び込めたのか……？ いや、どう見ても

三次の女の子だけど……っか、誰だこの子……？)

寝起きの頭で、ぼんやりと考える。

「……起きてない？」

「あ、いや、起きた……と、思うけど……」

首を傾げる少女に答えると、少女は一つ頷いて踵を返した。

「朝ご飯、もうすぐ出来るってイオ姉が。来て」

「あ、うん……」

促されるままにベッドを降りて、少女に続いてキッチンへと向かう。

その後ろ姿を見て、今更ながらに彼女が制服姿であることに気付いた。

そして、キッチンに入ると。

「あっ、春輝さん。おはようございます、キッチンお借りしてますね」

制服の上にエプロンを掛けた少女が振り返ってきて、春輝の脳は更なる混乱に陥った。

「っはよ……って、あははっ！ 春輝くん、寝癖すっごいよ！」

更にもう一人、制服姿の少女がテーブルに皿を並べながら春輝を見て笑っている。

(……ああ、そうか)

徐々に頭が働き始めてきた春輝の脳裏に、昨日の夕方からの記憶が蘇ってきた。



人見春輝は、どこに出しても恥ずかしくない社畜である。

「よし、残るはこのコマンドのみ……」

この日も朝から膨大な業務をこなし、既に時刻は定時間際。普段であればむしろこちらが本番開始なのだが、今日は現在実施しているシステムテストが完了すれば業務終了となるように調整していた。春輝にしては大変珍しく、定時上がりの予定だ。

なぜならば、この後に大事な大事な用事が控えているためである。

(これが通れば、小枝ちゃんのトークライブには余裕で間に合う……!)

そう考えながら、ツターン！ とエンターキーを力強く打つ。

(さあ、どうだ……?)

結果に、エラー無し。テストは正常完了だ。

(うっし……!)

内心で、ガッツポーズ。

「人見くん、来週の会議で使う資料なんだけどさ。作成お願い出来る？」

「あ、はい。承知です」

そのタイミングで先輩社員から依頼が入ったので、春輝は軽く頷いて返した。

「人見、週末の業者受け入れの担当だけど、人見にしといていい？」

「問題ないッス」

「人見ちゃん、今度のメンテの作業者、君にしとくよー」

「はい、やっときます」

「サーセン人見さあん、こないだの障害について説明してほしいってお客さんがー」

「うい、明日行ってくる」

次々舞い込んでくる仕事を、全て受け入れる。

春輝は、基本的に人の頼みを断るといふことをしない。それは、人が良いから……というわけではなく。断るためのコミュニケーションや、その結果生じるかもしれない人間関係の変化がめんどうい、というのが主な理由である。だから、返事も必要最低限だった。

「人見さん、頼まれてたデータ入力終わりましたっ!」

「ん、ありがとう小桜さん」

それは、バイトである小桜伊織に対しても同じである。

「いえいえ！ 次は何を致しませう！」

張り切った調子で、前のめりに尋ねてくる伊織。

「いや、今日のところはもう頼むことはないかな」

「あ、そうですか……」

しかし春輝の答えに、シユンと項垂れる。

平素であれば、そんな姿もスルーなのだが。

「小桜さんはいつもやる気満々だね」

この後の『お楽しみ』ゆえ機嫌の良い春輝は、気まぐれにそんなコメントを口にした。

「はいっ！ 人見さんのお役に立ちたいと思っっていますので！」

すると伊織は、勢いよく顔を上げてフンスと鼻息も荒く言い切る。

（……んんっ？ 俺の……？）

春輝が首を傾げる中、伊織はハツとした表情となった。

「ま、間違えました！」

その顔が、見る見る真つ赤に染まっていく。

「えと、あの、会社のです！ 会社のお役に立ちたいと思っっているのです！」

「そ、そうだよね……」

必死な様子で言葉を重ねる伊織に、「はは……」と春輝は苦笑を返した。

「まあ、もうすぐ定時だし帰り支度でもしといて」

「は、はいっ！ 了解です！」

赤い顔のまま踵を返し、伊織はバタバタと駆け足で自席に戻っていく。

それをぼんやり見送る春輝の耳に、周囲の話し声が入ってきた。

「伊織ちゃん、今日も可愛いねえ」

「青春、って感じですなあ」

「にしても、人見の奴は……そうだよね、じゃねえよ……」

「今に始まったこっちゃねえけど、全然小桜さんの気持ちに気付かねえんだもんなあ」

生暖かい視線が向けられるのを感じ、春輝は口を『へ』の字に曲げる。

（小桜さんの気持ちくらい、わかっているっての）

口に出さないのは、同僚と雑談するという習慣が春輝には全く存在しないためである。

（仕事が好き、ってことだろ？）

もしここに読心術を習得した者がいれば、やっぱ一ミリもわかってないじゃねえか！  
といったツツコミが入ったことであろう。

「いいですねえ先輩、女子高生におモテのようで」

同僚と雑談するという習慣が全く存在しない春輝ではあるが、唯一例外は存在する。それが、椰搦する調子で話しかけてきた彼女……桃井貫奈だ。

二つ下の後輩で、春輝が彼女の新人時代にOJTを担当して以来ずっと同じチームに属している。やや茶味がかったミディアムヘアはキッチリ整えられており、シックな服装をピシッと着こなす姿に細いフレームの眼鏡もよく似合っていた。出来る女感をバリバリに身に纏い、実際チームのエース級に成長しつつある才女だ。

「冗談でも馬鹿なこと言うなつての。噂になったりしたら小桜さんが可哀相だろ」

春輝の口調も、他の同僚と接する時よりも随分と気安いものである。

「ま、この俺がモテるなんて話を信じる奴もいないだろうけど」

「はあ……まったく、先輩のそういうとは昔っから変わりませんねえ……」

ちなみに、この会社には先輩社員を『先輩』と呼ぶ文化は存在しない。

にも拘わらず、なぜ彼女が春輝のことをそう呼ぶのかという点。

「知ってます？ 実は、高校の頃から先輩のことをずっと好きな女性がいるんですよ」  
彼女は春輝にとって、高校の頃からの後輩でもあるためだ。大学まで一緒だったのはともかくとして、入社式で彼女を見かけた時は驚いたものである。偶然とは恐ろしいものだ……と、春輝は思っている。

「嘘つくなら、もうちよいりアリティのある設定にしろよ。ていうか俺、高校時代から付き合いのある奴なんてお前くらいだぞ？」

「……はあ」

鼻で笑う春輝に、貫奈は先程よりも大きく溜め息を吐いた。

「もう自分で答え言ってるのに、なんで気付かないかなこの人は……まあライバルの気持ちにも気付かない、つていう意味では悪いことばかりでもないんだけど……」

顔を横に向けてのボンボンとした吹き方は、春輝の耳には届かない。

「あ……と、ところで、先輩」

顔を逸らしたまま、貫奈の声が若干上擦った。

「今日は朝から、随分とご機嫌のようですね？」

「……わかるのか？」

自分の顔を撫でながら、春輝は小さく首を傾げる。

「先輩の表情は、わかりやすいですから」

「そうかな……？」

むしろ、他の人からは感情がわかりづらいと言われることの方が多いのだが。

「それはやはり、今日の作業が順調に終わることが見込めていたからでしょうか？」

「まあ、そうとも言えるかな……?」

正確には、そうなるように全力で調整した結果である。全てを明日以降の自分に放り投げた結果、というのがより正確な表現かもしれないが。

「ということは、今日は早く上がれそうだと」

「このまま何事もなければな」

どこか白々しい印象を受ける貫奈の口調に疑問を覚えつつも、答える。

「では、その、良ければなんですけど……仕事上がりに飲みにいきませんか?」

「あ、悪い今日用事入れちゃってるわ」

「……ですよー」

彼女はこうしてちよくちよく飲みに誘ってくれるのだが、春輝が早く上がる時というのは(主にオタク関連の)用事がある時であり、ほとんど実現したことはない。それでも懲りずに誘ってくれる辺り、飲み会が好きなのだろうと春輝は思っている。

「先輩、ちよくちよく用事があるって早く帰りますけど何をしているんですか?」

少しだけ拗ねたような口調で、貫奈が尋ねてきた。

「……いや別に、大したこともない野暮用だよ」

ちなみに春輝は、オタクであることを周囲に隠している。それは、高校の頃からの付き

合いである貫奈に対しても同様であった。中学時代、イジメとはいかないまでもかなりのオタク弄りをされて、それ以来極力人にはオタク趣味を明かさないでいるのだ。

と、貫奈と会話を交わしているうちに定時を告げるチャイムが鳴った。

「おっと、それじゃ俺はこれで……」

これ幸いと、春輝は話を打ち切る。既に、帰る準備はほとんど終わっていた。

後は念のため、新着メールがないかチェックするだけ……の、はずだったのだが。

「……おい、ちよっと待てこれ」

ドツと汗が噴き出してきた。メールフォルダ……それも、エラー通知メールだけを振り分けているはずのフォルダに、大量の新着メールが入り始めたためだ。

直後、オフィスのあちこちから電話が鳴り響き始める。

「人見! オペレーターさんから電話で、サーバルームでアラームランプが点灯してるっ  
てよ! たぶんハード障害だけど、これお前んとこのシステムだよな!」

「人見くん……なんか、連携システムでもエラー出まくってるんだけど……これも、恐らくそっちのシステムが止まった影響だよねえ……」

「人見さん! お客さんからお電話ッスー! 定時間際にシステム止まっちゃったせい  
か、めっちゃ怒ってます! アタシじゃ収めるの無理めなんスけどー!」

次いで、続々と上がってくる報告。

「先輩……ご愁傷さまです。とりあえず、サーバルームの方は私で対応しておきますね」  
「うん、よろしく……」

苦笑気味に言ってくる貫奈に、春輝は力なく返事する。

「あ、あの、人見さんっ。私に出来ることとかって……」

「いや特に無いし、バイトはちゃんと定時で帰りな」

「はい……」

駆け寄ってきた伊織に短く返すと、伊織はシユンと項垂れて踵を返した。

「人見くうん」

そのタイミングで、のっしのっしと上席から近づいてくる巨体は縦山課長である。

「今日定時で申請出てるけど、残業申請に切り替えとくね？」

悪い人ではないのだが、間が悪いというか人を苛つかせる発言が多いのが玉に瑕だ。

「頼りにしてるよ、我が課の……いや、我が社のエース！」

今は、そのお世辞も苛立つだけであるが……いずれにせよ、この時点で。

「はい……頑張ります……」

トークライブへの参加が絶望的なものになったことを確信する春輝であった。



それからヤケ酒に走った結果、三姉妹を泊めることになり。

「おー、凄（まじ）い！ 一軒（いっけん）家（か）じゃーん！」

春輝の住む家にまで連れて行つたところで、次女……露華（ろか）がそんな声を上げた。

「でも、家の人とか大丈夫（だいじょうぶ）なの？ 未成年（みんねん）三人も連れ込んだら、通報（つうほう）されんじやない？」

あつ、それともお？ しよっちゆう女の子連れ込むから慣（な）れちゃつてるとかですかあ？

「こ、こら露華、失礼（しつれい）でしょ！」

長女である伊織（いおり）が、ニンマリ笑う露華（ろか）を窺（たの）める。

「いや、むしろ今のはウチの氣遣（きづか）いでもあつただけど？」

「……未成年（みんねん）者（もの）略取（りやくと）誘拐（ゆうかい）罪（つみ）？」

「どこでそんな言葉（ことば）覚えてきたの白亜（はくあ）！」

ポツリと呟（つぶ）く三女・白亜（はくあ）に、伊織（いおり）は驚愕（きょうがく）に目（め）を見開（ひら）いていた。

ちなみに、ここまでそれぞれ自己（じこ）紹介（しょうかい）済み。この春から露華（ろか）が高校（こうこう）一年生（いちねんせい）、白亜（はくあ）は

中学（ちゅうがく）三年生（さんねんせい）になると聞（き）いている。伊織（いおり）が高校（こうこう）二年生（にねんせい）になることは、既（き）知（ち）の情（じょう）報（ぱう）だ。

「あんま騒（さわ）がないでくれる……？ マジでご近所（きんじよ）に通報（つうほう）されかねないから……」

「あ、す、すみません……！」

頬（ほ）をヒクつかせながら言うと、伊織（いおり）が深々（しんしん）と頭（かぶ）を下（くだ）げてきた。

「あと、この家（か）には元々（もともと）両親（りやうしん）と住（す）んでただけど……俺（おれ）が社（しゃ）会（かい）人（にん）になつた年（とし）に親（おや）父（ふ）が転勤（てんきん）になつてな。お袋（ふくろ）もそれについてつたんで、今はこの家（か）に一人暮（ひとり）らしなんだ」

「……ふーん？ そんなだ？」

露華（ろか）が、どこか含（こ）みのある調子（てうし）で言（い）いながら春輝（はる輝）を横目（よこめ）で見（み）てくる。

「……？ だから空（く）き部屋（へや）も多いんで、一人一部屋（いぶつ）使（つか）つてくれていいよ」

その反応（はんおん）に若干（くわんごん）疑問（ぎもん）を覚（おぼ）えながらも、春輝（はる輝）はそう説明（せつめい）した。

「わお、太（お）つ腹（はら）じゃん春輝（はる輝）タン。お腹（はら）はそんなに出てないにね？」

さわさわつとお腹（はら）に触（ふ）れられ、ちよつとビクツとなる春輝（はる輝）。

「ちよ、露華（ろか）、だから失礼（しつれい）だつて！ それに、ちゃん（ちゃん）と人見（ひとみ）さん（さん）つて言（い）いなさい！」

「ははっ、いいよ別に呼び方（よびかた）なんて何でも」

その猛烈（まうりゃく）な距離（きり）の詰（つ）め方に「お、おう……流石（さすが）はギャル（ギャル）だな……」と謎（なぞ）の感銘（かんめい）を受（う）けたものの、言葉（ことば）通り春輝（はる輝）は別段（べつだん）何（なに）と呼ば（よ）べようが構（かま）わないと思（おも）っていた。

「なんだつたら小桜（こざくら）さんも、もつとラフ（ラフ）に呼（よ）んでくれてもいいぜ？」

「えと、じゃ、じゃあ……春輝（はる輝）さん、とか……」

冗談めかして肩をすくめてみせると、伊織が消え入るような小声でそう口にして。

「……えっ？」

「えっ？」

まさか本当に呼び方を変えてくるとは思っていなかった春輝が呆けた声を上げると、伊織も似たような調子の声を返してきた。

「あっあっ……」

街灯に照らされる伊織の顔が、たちまち真っ赤に染まっっていく。

「す、すみません、なんでもないです人見さん！」

「あ、いや、ちよつと驚いただけだから。呼びたいように呼んでくれていいよ、マジで。ただ、会社ではこれまで通り『人見さん』で頼むな？」

「は、はいっ！　ひと、いえ、は、春輝さんっ！」

「ははっ……」

やけに力強く名前を呼ばれて、春輝はなんだか少し照れくさくなって頬を掻いた。

「……はいはい、二人でラブイ空気出してないで早く家ん中入っちゃおうよ」

と、二人の間にズイツと露華が割り込んでくる。

「そんな、ラブイ空気だなんて……私と春輝さんは、そんなんじゃ……！」

「お姉、今そこ掘り下げなくていいから」

引き続き赤い顔でパタパタと手を振る伊織に、露華がジト目を向けた。

「ま、まあ、とりあえず上がってくれ」

未だちよつとドギマギしながらも、春輝は鍵を差し込んで玄関の扉を開ける。

「そんなやお言葉に甘えてー」

「すみません、お邪魔します……」

「……お邪魔します」

堂々とした足取りの露華、恐縮しきりの伊織、警戒するように中を見回す白亜、という順番でそれぞれ家の中へと上がっていく。

「二階の部屋が空いてるんで、好きなどこを使ってくれていいよ。布団は押し入れの中に入ってる。長らく使ってないからちよつと埃っぽいかもしれないけど、そこは勘弁な」

「何から何まですみません……」

階段の方を指さしながら言うと、伊織がまた深々と頭を下げてきた。

「それじゃ二人共、行くよ」

「うん」

伊織が先頭となって階段を上がっていく、白亜がそれに続く。

「……りよーかい」

更に、露華も階段の方に足を向け。

「ところで、春輝クンの部屋はどこなの？」

けれどそれ以上進むことはなく、振り返って尋ねてきた。

「ん？ そのの、一番近いとこだけど？」

なぜそんなことを聞くのだろうと首を傾げながらも、自室を親指で指しながら答える。

「シャワーは？ 浴びる？」

質問を重ねる露華。

「いや、今日はもうそのまま寝るつもりだけど……」

「……そっか」

何やら、その表情はやけに硬いように思えた。

「シャワー浴びたいなら、好きに使っててくれていいよ。その突き当たりだから。バスタオルは脱衣所の引き出しに入ってるし」

「ん……」

自分が浴びたいから話を振ってきたのかとそう言ってみるも、露華の反応は鈍い。

「くあ……」

気にはなったが、ここに来て春輝も眠気に襲われた。小桜姉妹との出会いの衝撃で一時的に吹き飛んではいたが、元々今日は結構な泥酔状態だったのだ。

「まあ、基本的には好きに使ってくれ。そんじゃ、俺はこれで……」

と、自室に入る春輝だった。

「ん……」

なぜか、露華が春輝に続いて部屋に入ってきた。

「……？ まだ、何か聞いときたいことでもあったかな？ 悪いけど、出来れば早めに済ませてくれるとありがたいんだけど……」

ちよっと面倒に思いながら、ベッドの前で振り返る。

「……わかった」

俯き気味だった露華の顔が上がり、春輝と視線が交差した。

その目には、決意の光のようなものが宿っているように見えて。

「えいっ」

「おわっ……!？」

肩を押してくるという露華の思わぬ行動に、春輝はあっさりとベッドへと倒れ込む。

「いきなり何を……」

ベッドに手を突き、半身を起こす春輝。

その視界に、飛び込んできたものは。

「ていやっ！」

そんな声と共に、制服を脱ぎ捨てる露華の姿であった。

下着のみを纏った身体が頭わになる。スラリとした四肢に、くびれた腰回り。スレンダーなのは制服姿の時の印象通りだが、こうして見ると胸の膨らみも結構あるようだ。なんて、どこか冷静に観察してから。

「ちよ、いや、は!? 急に何やってんの!?!」

我に返った春輝はそう叫んで、今更ながらに顔ごと目を逸らした。

「ね? ウチ、結構いい身体してるっしょ?」

そんな春輝の膝の上に、露華が座ってくる。

「お子ちゃまな白亜は論外として、お姉もオトコ慣れしてないからさ。ウチがいっちばん、春輝クンのことを気持ちよくしてあげられるよ?」

視界の端で、露華が妖艶に微笑むのが見えた。

「だから、シよ?」

春輝の胸に手を当て、耳元で囁く。

(いやいやいや、何これ何この展開!? まさか夢か!? 俺いつの間にか寝てた!? にしてもエロゲのやりすぎだろこんな夢なんて!)

予想もしていなかった流れに、内心でテンバる中……春輝は、ふと気付いた。

(つて、この子……)

露華の手が小さく震えているのが、シャツ越しに伝わってくることに。

「……あのなあ」

何と言っているものやら迷い、春輝はガリガリと頭を搔く。

「露華ー? どこ行っちゃったのー?」

とそこで、部屋の外から伊織の声が聞こえてきた。

「あれ……? この部屋、さっきは閉まっていたような……」

次いで、部屋の中へと伊織が顔を覗かせる。

「あつ……」

その瞬間から一秒ほどの間で、彼女の表情は目まぐるしく変化した。

まず、驚き。次いで酷く傷ついたような顔。最後にそれが覚悟を秘めたものになる。

「……そう」

一度目を閉じて、一瞬の後に再び開く伊織。

それから、彼女もバツと制服を脱ぎ捨てた。露華に比べて、全体的にふくよかなシルエツト。けれど決して太っているわけではなく、健康的な魅力が感じられる。そして何より目を引くのは、その驚異の胸囲と言えよう。普段控えめな彼女の代わりに自己主張しているかのように、ブラ越しでも張りの感じられるそれがデンと高くそびえ立っていた。

「って、だからなんで脱ぐんだよ!？」

ついつい本能的に眺めてしまった後で、今度も慌てて視線を逸らす春輝。

「春輝さん!」

「うおっ!？」

その顔に、巨大な柔らかい『何か』が押し付けられる。

「お願いします! 私のごときは好きにさせていただいて構いませんので、妹たちには手を出さないでください! どうかどうか!」

「いや、ちょ……」

「っ……春輝くん、ここはウチにしときなつて! お姉より絶対いいよ!」

「二人共、待……」

両側から、グイグイと二人の色んなところが春輝の身体に当たってきた。

「おっぱいは、私の方が大きいので!」

「ウチの引き締まった身体を味わいたいっしょ!？」

「だから、俺の話を聞いて……」

二人とも必死な様子で、春輝の声は届いていないようだ。

「あれ、露華……? もしかして今、私のことデブって言った……?」

「は? お姉こそ、ウチのこと貧乳って言ったっしょ?」

「別に私、そんなこと言っていないし……」

「ウチだって言っていないし……」

「いい加減に、しろ!」

なぜか春輝越しにちよつと険悪な雰囲気になり始めたところで両手を広げ、二人を引き離す。春輝としては狙いなど定められる状況ではなく、適当に押した形である。

が、しかし。

『あっ……』

二人の、呆けた調子の声が重なった。その段に至りようやく、春輝は手に返ってくる感觸がやけに柔らかいことに気付く。だいぶ嫌な予感が出て、左右に目を向けると。

「あの……やっぱり、大きい方がいいですよね……?」

「いやいや、ウチだって結構あるよね……?」

自分の手が、二人の胸にガッツリ当たっていることが確認出来た。

「だ、だから私を……!!」

「や、ウチを……!!」

二人は顔を赤くしながらも、それぞれまた春輝へと迫ろうとしてくる。

「だから、一旦落ち着け! 俺に、そういう意図はない!」

しかし春輝がそう叫ぶと、二人揃って「へ……?」と目を瞬かせた。

「でも春輝クン、一人暮らしの家に女連れ込むって完全にそういうことじゃん……」

「どうやら、露華は先の春輝の発言をそう捉えていたらしい。」

「違うっての! 普通に宿泊場所を提供しただけだ!」

「そ、そうなの……?」

大声で続ける春輝に、強張っていた露華の身体からようやく力が抜けてきた。

「あの、でも、さっき、その……露華に襲いかかってたんじゃ……?」

「むしろ俺が襲われた側だわ! さっきの体勢見りゃわかつただろ!」

「そ、そういうえは確かに……?」

伊織も、同じく。

「わかつてくれたなら、まず服を着ようか……?」

『っ!?!』

春輝が言うとカッと顔を赤くし、二人共慌てた様子で春輝から離れて服を手にする。

春輝が背を向けてからは、しばし部屋の中に衣擦れの音だけが響いた。

そして、数秒の後。

「すみませんでしたあ! 恩人を疑うような真似を……!」

伊織が、土下座せんばかりの勢いで頭を下げる。

「いやあ、はっはっ。ウチとお姉のアピールに耐えきるとは、春輝クンの自制心は鋼鉄並みだねー。それか、もしかして女の子に興味がない系だったりする?」

一方の露華は、ケラケラと笑っていた。

「こら露華、ちゃんと謝りなさい!」

「むぎゅ……!」

しかし伊織に頭を押さえつけられ、無理矢理に頭を下げる形となる。

(あー……こういう時、なんて言えばいいんだろうな……そうだな、歳の離れたヒロイン

を諭すイケメン主人公的なものを意識して……)

なんて、考えながら。

「まあ、あれだ。俺も、子供に手を出すほど女に不自由してるわけじゃないからな」

そう言いはしたものの、半分は嘘である。不自由していないのは、二次元限定の話だ。あくまで春輝視点では、であるが。

「そ、そうなんです……」

「もう、子供って歳じゃないんだけど……?」

伊織がちよっと暗い声で、露華が抗議を滲ませた調子でそれぞれ呟く。

「子供だよ、俺からすればな」

これも、半分嘘であった。ぶっちゃけ、先程の二人に対して『反応』してしまっていたのは事実だから。ただし、手を出す気がないというのは誓って本当である。

「っーか俺、明日も仕事なんだよ……早く寝かせてくれ……」

なお、これだけは一〇〇%本心からの言葉だった。

「あ、はい。本当に、すみませんでした……」

今日何度目になるかわからない、伊織の謝罪。

「……………ごめんね?」

小さな小さな声ながら、露華の言葉も確かに春輝の耳に届く。

「はいよ。君らも、いいからもう寝な」

春輝がひらひらと手を振ると、二人はもう一度頭を下げた後に部屋を出ていった。

「……………はあ」

扉が閉められたのを確認した後に、春輝は重い重い溜め息を吐く。今日は色んなことが起こりすぎて、何に対する溜め息なのかは自分でもよくわからなかった。

今日の障害の後始末やら、小枝ちゃんの次のトークライブの予定やら……何より、小桜姉妹のことやら。考えなければいけないことは、沢山ある気がしたが。

「……………寝よ」

とりあえずは、全て放り投て夢の世界に旅立つことにした春輝であった。



「? 春輝さん? どうかされましたか?」

「……………寝ぼけてる?」

伊織と白亜の声に、春輝の意識は現実に戻ってきた。

「あ、ああ、そうなんだよ……昨日寝たのも遅かったしさ」

軽く笑って返事しながら、考える。

(マジ、酔った勢いで手を出したりしないで良かった……)

そうなっていれば、今朝の彼女たちの表情はもっと違ったものとなっていただろう。

（この子たちの笑顔を守れた……なんて言うのと、流石に大げさか）

そう考える春輝だが……昨晚の記憶は、ハッキリ脳裏に残っており。目の前の彼女たちとその下着姿が重なって見えて、密かにちよつとドギマギしているのも事実であった。

「あ〜？ さては、ウチのセクシーボディを思い出してコーファンしちゃってるう？」

そこに露華のニンマリとした笑みを向けられ、ギクリと春輝の顔が強張る。

「……ははっ、子供が何を言っているんだか」

笑い飛ばして見せるも、表情を取り繕えたかちよつと自信はなかった。今の露華はノーマイクのようで昨晚よりスツキリとした印象となっているが、それでも十二分に美人と評せる顔立ちである。正直なところ、春輝も本心では彼女を『子供』と断じきれずにいた。

「またまた、強がっちゃつてえ。やらしい視線を感じるんですけどお？」

「ふっ、自意識過剰なんじゃないか……？」

鼻で笑って見せながらも、自身の胸元を掻き抱く露華からそつと視線を外す。

「はい、目え逸らしたから春輝クンの負けー！」

「何の勝負なんだ……？ つーか、朝からテンション高えな……」

嬉々として指差してくる露華に、乾いた笑みが浮かんだ。

（でも、昨日より気安くなった感じがするな。ちよつとは信用してくれただってことか？）

伊織に「こら、指差さないの！」と窘められる露華を眺めながら、そんなことを思う。

と、そこで横合いから視線を感じてそちらに目を向けた。

すると、探るような目つきの白亜と視線が交錯する。

「……お兄さん。ロカ姉と、何かあったの？」

「い、いや、別に……？」

実際『無かった』とは断定しづらく、返答は若干しどろもどろなものに。

「そ、そんなことより！ 朝飯、ありがとうな！」

無理矢理に話を打ち切り、食卓につく。

「……おお」

そこでようやくテーブルの上に目を向けて、感嘆の声を上げた。

「凄いな、本格的だ」

「そんな、おおげさですよ」

はにかんで手をバタパタと横に振る伊織だが、春輝としては本心からの言葉であった。卵焼きにほうれん草のおひたし、焼いた魚の干物。ご飯は炊きたてらしく温かい湯気が立ち上っており、それは味噌汁も同様であった。味噌汁の具は、豆腐と油揚げのようだ。

「あつ、それと、すみません。冷蔵庫の中身、勝手に使っちゃいました」

「いや、それは全然いいんだけど……ウチの冷蔵庫に、こんなもんあつたっけ……？」  
時折酔った勢いでつまみを作ろうと適当に食材を買い込んで帰ることがあるのだが、実際に作ったことは数えるほど。結局食材のほとんどは冷蔵庫に置きっぱなしなので何が存在していてもおかしくはないが、何が入っているのかは春輝自身も把握していなかった。

「ええ、まあ、ギリギリ使えるのがいくつか……」

伊織の苦笑から察するに、どうやら大半は危険物と化していたらしい。

「にしても、残り物で作れちゃうところが本当に料理出来るって感じがするな」

「イオ姉は、我が家の料理担当だったから」

春輝が感心の声を上げると、白亜が自慢げにその小さな胸を張った。「だった」という過去形の意味や、彼女たちの家庭環境について、興味を抱かなかつたと言えは嘘になるが……それは、努めて頭の中から追いやつた。

「それよりほら、冷めないうちに食べちゃいましょう」

照れているのか、伊織が少し早口気味に言いながら椅子に座る。

「ああ、そうだな」

春輝が頷いている間に、露華と白亜もそれぞれ空いていた席に着いた。

「それでは……いただきます」

『いただきます』

最初に伊織が手を合わせて、露華と白亜もそれに続く。

「……いただきます」

長らくそんな習慣がなかった春輝が、一拍遅れた。

(……味噌汁なんて、久しぶりだな)

そんなことを考えながら、ズツと味噌汁を啜る。

なんだか、とても懐かしい味が口の中に広がった気がした。

「うん、美味いよ」

「お、お粗末様です……」

本心からの言葉を向けると、伊織は顔を赤くしながらも嬉しそうな笑みを浮かべる。

「……ふうん？」

そんな姉の姿を見て、露華がニンマリと笑った。

「春輝くん、卵焼きも美味しいよ？」

と、箸で卵焼きを摘み。

「ほら、あーん」

それを、春輝の方に差し出し出してくる。

「こ、こら露華！ お行儀が悪いよ！」

露華を叱りながらも、伊織はチラチラと春輝の方を窺っていた。

それを見て、露華がますますイタズラっぽい笑みを深める。  
(くっ……露華ちゃんめ、さてはどうせこっちがヘタレるだろうと踏んでるな……?)

実際、普段の春輝であればここで乗ったりはしない。

(ならここは、あえて鈍感系主人公のように……)  
しかしそんな風に考えたのは、前日から続く非日常感ゆえ判断能力が鈍っていたのか。

「それじゃ、いただこうかな」

『あ……』

バクリと露華の差し出す卵焼きを口に入れた春輝に、伊織と露華が小さく声を上げる。

「うん、確かに美味い」

「ふ、ふっふーん？ そうでしょ？」

露華のニンマリ顔が若干硬く見えるのは、恐らく気のせいではあるまい。

「それじゃ、ウチも食べよ」と  
けれどそれも一瞬のことで、彼女の表情は徐々に平常運転な感じへと戻っていく。

「ウチも好きなんだよねえ、お姉の卵焼き」



イタズラっぽい雰囲気を増しながら、露華は卵焼きへと箸を向けた。

「おやおやあ？ 春輝クン、ウチのお箸が気になっちゃってるう？ なんてかなあ？」

「い、いや別に？ たまたま見てただけだよ」

思わずそこを見てしまったことを指摘され、今度は春輝に動揺が生まれる。

「さあて、それじゃ食べまーす。このお箸で、食べちゃいまーす」

ニマニマ笑いながら、露華が卵焼きを箸で摘……もうと、したところで。

「露華？」

静かに、しかし妙に力強く伊織の声が響いた。

「お行儀が悪いって言うてるでしょ？ はい、新しいお箸」

ニコニコと微笑みながら、伊織は露華へと箸を差し出す。

「いやお姉、それじゃなんかウチが負けた感じになっちゃうし……」

「露華？」

「だからね、お姉……」

「露華？」

「いやなんか、目が怖……」

「露華？」

「あ、はい……」

微塵も揺るがぬ笑顔でひたすら繰り返す伊織に、露華が根負けしたように頷いて箸を受け取った。なんとなく姉妹間の力関係を垣間見た気がする春輝である。

「……………」

なんて思っていると、伊織が視線を向けてきた。

無言ではあるが、何やら抗議するような雰囲気を感じられる気がする。

「……………」

「……………」

「……………」

その後は、少し不貞腐れたような表情で食事を続ける露華、チラチラと春輝に目を向けてくる伊織、その視線に若干の居心地の悪さを感じる春輝……といった感じで、微妙に気まずい雰囲気の流れる中で食器を動かす音だけが響き。

「……何、この空気」

白亜の咳きが、虚しく沈黙の中へと溶けていった。

数年ぶりの「いただきます」を口にした、約一時間後。

「ぜえ……はあ……あつぶねえ、ギリセーフ……」

「ひい、ふう……ま、間に合つて良かったです……」

春輝と伊織は、発車間際に滑り込んだ電車の中で乱れた息を整えていた。

久方ぶりに家で朝食を食べていたら時間の感覚が狂い、遅刻ギリギリの時間に家を出ることになって駅までダッシュした結果であった。

とそこで、春輝はふと隣に立つ制服姿の伊織に疑問を抱く。

「ん……？ ていうか、なんで君も一緒に電車に乗ってるんだ……？ 学校は……？」

「あはは、昨日も朝から出社してましたよ……もう春休みに入ってるんです」

「ああ、なるほど」

長期休みという概念から離れて久しく、その発想がなかった春輝であった。

「……………」

「……………」

その後、少しの沈黙が挟まって。

「……あの、春輝さん」

伊織が、表情を改めた。

「昨日は泊めていただき、本当にありがとうございました」

「いって、俺から言い出したことだし」

何度目になるかわからないお礼に、春輝は軽く苦笑する。

「私たち、今日中には出ていきますから……これ以上、ご迷惑はおかけしませんので」

だが、続いた言葉に小さく眉根を寄せた。

「……行く当てはあるのか？」

尋ねはしたが、答えは予想出来る。

行く当てがあるなら、端から『神』になど頼るまい。

「それは、その……えっと……」

果たして、伊織はしどろもどろになって答えに窮した様子だ。

「今日から暖かくなるらしいので、外でもたぶん寝られますし大丈夫ですよ！」

そんなことを言い出す伊織に、春輝は内心で悩む。

「うーん……流石に、これを聞いた上で放り出すっていうのはなあ……まあぶっちゃけも  
う何泊かするくらい構わないんだけど、それ言つて大丈夫か……？ なんかこう、下心が

あるように思われない……？ 初日は油断させといて、みたいな……いやいや、昨日あんなだけハッキリ意思表示したんだし大丈夫だろ……大丈夫だよな……？

そんな迷いが、胸に渦巻いていた。

「それに、いざとなれば私が……」

けれど、伊織の表情にまた少し変化が生じて。

「そんじゃ、とりあえず行く当てが出来るまではウチにいれば？」

それを感じ取った瞬間、気が付けば春輝はそう口にしていた。

アニメの主人公みたいに、なんて考えることすらなかった。

「で、でも、私たち、何も返せるものもありませんし……」

「そこは、ほら、あれだ。代わりに、家事はやつてもらうから」

言い訳がましく、条件を付け加える。

「大体、一人であの家をキープするのも結構大変なんだ。家って、人が住んでないと老朽化が早いって言うだろ？ 使つてない部屋でも、時々空気を入れ替えてやらないとカビ生えちゃうしさ。だから、住んでくれる人がいる方がたいんだよぶっちゃけ」

早口気味で捲り立てた言葉も、必ずしも嘘ではないけれど。

「……だからな」

言おうかどうか迷った末、少し間を置いて春輝は再び口を開いた。

「もうするなよ、昨日みたいなこと」

自分で思ったよりも、その言葉は厳しい口調となって口から出た。

脳裏に蘇るのは、昨晚の伊織の姿だ。彼女は、もし春輝にその気があれば本当に身体を差し出したことだろう。先程の伊織の表情は、あの時の決意に満ちたものと同じに見えた。恐らく再び住む場所を探すことになれば、彼女は同じことをするつもりなのだと思う。それを想像すると胸が妙にざわついて、半ば無意識に先程の言葉が口をついて出たのだ。

(……とんだ偽善だな)

自身に、苦笑する。

(俺にこんなこと言う権利なんてないし、責任を持てるわけでもない。なのに、ただ俺がなんとなく嫌だから『するな』ときた。せいぜい数日宿泊場所を提供することくらいしか出来ないのに……それ以上何かするつもりはないってのに、さ)

口に出したことを、春輝は今更ながらに後悔し始めていた。

「は……」

そんな春輝の傍らで、伊織は先程から口をパクパクとさせており。

「はいっ！」

かと思えば、やけに大きく頷いた。その頬は紅潮しており、なぜか嬉しげに見える。

「春輝さんに誓って、もうしませんっ！」

「いや、俺に誓ってもらう必要はないけど……」

なんとなく照れくさくなって、春輝は目を逸らして自身の頬を掻いた。

「それじゃ、今日以降もウチに泊まってくことでもいいかな……？」

目を逸らしたまま、確認する。

「……はい。それじゃすみませんが、もうしばらくの間お世話になりますっ！」

再び大きく頭を上下させた後、伊織は満面の笑みを咲かせた。

（この笑顔が、一番のお返し……ってか？）

心中で、そんなことを考え……しかし、一瞬の後に。

（うわっ、我ながら似合わねえ台詞……やっぱ俺は主人公にはなれねえわ……）

猛烈に恥ずかしくなってきた、今度こそ口に出さなくて良かったと心から安堵した。



その後は特に何事もなく、会社に到着し。

「おはようございます」

「おはようございますっ！」

それぞれ挨拶の言葉と共に、オフィスに入った春輝と伊織。

「おはようございます、先輩、小桜さん」

たまたま入り口の近くにいた貫奈が、挨拶を返してくる。

「……お二人、揃って出社ですか？」

その眼鏡が、キランと光った……ような、気がした。

「ああ、たまたまそこで会ってな」

何気ない調子で、春輝が返す。

「……気のせいでしょうか？ 幾分、お二人の距離感とか空気感が昨日までと異なる  
 というか……どこか、気安くなったような……？」

貫奈の鋭い指摘。流石に昨日からの件を経て、『社員とバイト』というだけの関係より

は距離感が縮まっていることを、春輝自身も自覚していた。

「はっ、何を言い出すやら。別に、昨日までと同じだろ」

それでも、ここは惚けるしかない。

「そ、そうです！ 全然気安くないです！ むしろ、高いです！ 気高いです！」

伊織も、彼女なりに懸命に誤魔化そうとしてくれてるらしい。

「気高いというと、別の意味になつてくる気がするけれど……」

「あっ！ そ、そうですね！ 間違えました！ つまり、アレです！ えっと、その、私、人見さんに対して滅茶苦茶高い壁を感じてますので！」

「それはそれで、先輩が不憫なような……」

「す、すみません！ 良い意味で、です！」

恐らく狙っているわけではないのだからが、徐々に話がグダグダになってきているので結果的に誤魔化すことには成功していた。その流れに、密かにホッとする春輝だったが。

「と、とにかく、一夜を共にしたからといって何も変わっていませんので！」

突然の爆弾投下に、思わず噴き出しそうになった。

「い、一夜を共に……!？」

ビシリと貫奈が固まる。

「今なんか、一夜を共にとか聞こえたけど……」

「伊織ちゃんの声だよね……?」

「誰とだ……? やっぱ、人見さん……?」

「意外と言うべきか、ついにと言うべきか……」

しかもかなりの大声だったため、オフィス全体がザワツとし始めた。

「ちよ、いや、今のは比喩だよな!? たとえそうなくても、って意味で！」

慌てて春輝が火消しにかかる。

「へ……?」

自分の発言の意味がわかっていたいなかったのか、伊織はパチクリと目を瞬かせた。

けれど一瞬の後、ハツとした表情となつて顔を赤くする。

「そ、そうです！ あくまで喩えで！ 未遂でしたし！」

「みす、み、みすえ、未成年だもん！ ははっ、未成年に手を出すわけじゃないじゃないですかあ……! いや、マジで……!」

「そ、そうです！ 出されませんでしたので！」

「仮にそうなくても、っていうシミュレーション的にね！」

「その、春輝さんは……!」

「は、春来た！ 確かに春はもう来てるよな！」

春輝は入社以来、数々の炎上案件の火消しを請け負ってきた。

が、しかし。

(これなら、重障害の対応の方がまだナンボかマシだな……)

朝から、終電間際のような疲れを感じる春輝であった。

## 第2章 膝枕とヲタバレと買物と酔っぱらいと

小桜姉妹との同居を始めて、数日。

相変わらず春輝は残業まみれで、終電で帰ることも少くない日々だ。その点には、一ミリも変化はない。

ただ、帰ってからの生活は一変したと言っても過言ではなかった。

「ただいまー」

長らく口にするのがなくなっていた帰宅の挨拶と共に、自宅の玄関をくぐる。

「おかえりなさいっ」

「おかー」

「……おかえり」

すると、すぐに三人が迎えに出てきてくれた。

伊織が満面の笑みで、露華がヒラヒラと適当に手を振って、白亜はそんな露華に隠れるように……と、この場面だけでも三人それぞれの個性が見て取れる。

(……やっぱ、慣れないなあこの光景。なんか、画面越しに見てるみたいだ)

長らく一人で暮らしていた家に、制服姿の少女が三人。

未だに、どこか現実感が欠如しているように感じられた。

「春輝くん、何ポーッとして……あつ？ もしかして、ウチらの可憐さに見とれちゃってたかじゃあ？ お客さん、ウチはお触りオーケーですよお？」

と、ニンマリ笑った露華が身体を寄せてきて春輝の手を握る。

(相変わらず、すげえ気軽にボディタッチしてくるなこの子……)

その柔らかさに、密かに心音が高鳴りつつも。

「いや、ちょっと考え事してただけだっつーの」

表面上は、涼しい顔で返した。

「ふうん、考え事？ さては……ウチのことを考えてたんでしょっ？」

「なんでだよ。あー……その、仕事のことさ」

「えー、ホントお？ なーんか誤魔化してる感じがするなあ？」

「ははっ、何を誤魔化すってんだ」

そうは言いつつも実際のところは露華たちのことを考えていたのを誤魔化しているわけなので、完全に凶星を突かれている形である。

……と、そこでふと傍らから視線を感じた。

「……何かえつちなことを考えていた気配を感じる」  
 そちらに顔を向けると、ジト目を向けてくる白亜と目が合う。

「白亜ちゃんまで、何を言い出すんだか」  
 露華のボディタッチを少なからず意識していたことも確かなので、若干声（じやっかん）が上擦（うすず）った気がした。気のせいだと思いたい。

「……怪（あや）しい」

そんな春輝の内心を知ってか知らずか、白亜は引き続きジト目のままであった。

（どうにも、白亜ちゃんには未だに警戒（けいがい）されてんだよな……いやまあ出会って数日の男相手なんだし、普通（ふつう）に考えたらその方がまともな反応なんだろうけど）

白亜が毛を逆立てて警戒している姿を幻視（げんし）し、軽く苦笑する。

「……？」

春輝の視線が気になったのか、白亜が小さく首を傾（か）げた。

「……春輝クンってさ」

そんな中、今度は露華が春輝にジト目を向けてくる。

「もしかして、白亜くらの子（こ）が好みなの？」

「何を急に言い出すんだ」

突然の風評被害（ひがひ）に、春輝は抗議（こうぎ）の視線を返した。

「や、なんか二人で見つめ合ってたからさあ」

「ロカ姉、それは誤解（ごかい）。訂正（ていせい）を要求する。わたしは、お兄さんにガンつけてただけ」

「俺、ガンつけられてたのか……」

心外（こころはず）そうに言う白亜に、春輝は再び苦笑（くしやう）する。

「ま、誤解（ごかい）って点（てん）では俺の主張（しやうけん）も同じ（おな）じだけど」

「そっかなあ？ ウチやお姉（おねえ）に向ける目と、なーんか違う気がするけどお？」

クスクスと笑いながらの追及（ついせき）は、恐（おそ）らく答え（こた）えがわかった上（う）でのものなだろう。

「そう考えると、ウチとお姉（おねえ）に手（て）を出さなかったのも理屈（りくつ）は合うしい？」

「ちよ、露華、その時のことはもう言（い）わないって約束（やくそく）したでしょ……!？」

「そだっけ？」

赤（あか）くなつて手をわたわたと動かす伊織に、素（す）知らぬ顔（か）で首（くび）を傾（か）げる露華。

「まあ確かに、白亜ちゃんを見る時は父親（ちち）的な視線（しせん）になってるかもな」

あるいは、家に迎（むか）えたばかりでこちらを警戒（けいせい）してくるベットに対して向（む）けるもの、という方が近いかもしれない。そうも思ったが、流石（さすが）にそちらは口（くち）には出（い）さなかった。

「……訂正（ていせい）を要求（ようきう）する。わたしは、お兄（あに）さんの娘（むすめ）っていうほど小さくない。むしろイオ姉

やロカ姉と同じ、大人の女性」

白亜は抗議してくるが、頬を膨らませる様はますます彼女の印象を幼くしている。

「ははっ、そうだな。ごめんごめん」

「……謝罪に誠意を感じない」

笑いながら謝ると、白亜はブイツとそっぽを向いてしまった。

「……春輝クン的には、白亜くらいの方が接しやす感じ？」

「ん？ まあ、そうかな……」

実際、伊織や露華と接する際には未だにちよつとした緊張感を伴うのは事実である。

「ふうん？ そなんだ？」

ニヤリと笑う露華に、ここ数日の経験から春輝は既に嫌な予感を覚えていた。

「じゃあ、ウチも居候として家主が接しやすいようにしないとだねー」

と、露華が春輝の腕を取って自らの胸元に掻き抱く。

「ね？ パあパ？」

「ちよ……!？」

上目遣いで見つめられ、大いに春輝の鼓動は速まった。

その理由の半分は物理的な接触によるものであり、もう半分は。

「や、やめろ、露華ちゃんがそういうこと言うとなんか途端に犯罪臭がするから……!」  
謎の危機感によるものであった。

「えー？ なんでさ？ ウチと白亜なんて一つしか違わないじゃん？ なら、ウチのこと  
だって父親的な目線で見てくれてもいいんじゃない？」

「そういえばそうか……？ いや、君くらいの歳の時の一歳差はそこそこ違うだろ」  
一瞬納得しかけて、改めてツツコミを入れた。もつともこの場合、実際の年齢というよ  
りは露華と白亜のキャラの違いという部分が大きいような気がしたが。

「いやいや、誤差レベルだってパパ」

「誤差にしてはデカすぎるわ」

「パパだって、一年じゃそうそう変わらないっしょ？」

「そりゃ俺の歳なら……いやそれより、さりげなくパパ呼びを定着させようとするな」

「ねえパパあ、ウチ今月ちよつとピンチなんだけどお……お小遣い、いいかなっ？」

「完全にそっち方向に寄せないでもらえる!」

場合によっては国家権力が動きかねない絵面であった。

「ほ、ほら皆! いつまでもこんなところで喋ってないで、ご飯にしましょう!」

ここまで三人のやり取りをオロオロと見守っていた伊織が、パンと手を打つ。

「春輝さんも、お腹すいているでしょう？ もう準備、出来ていますので」

「ん、まあ……というか、今日も三人共まだ食べてないのか？」

これもまた、ここ数日で共通していることであった。春輝が帰ってくるまで、三人は眠るどころかご飯も食べずに待たせてくれている。それこそ、帰るのが夜中になっても。

「前にも言ったけど、別に俺のことを待たせてくれなくてもいいんだぞ？」

春輝は、それに申し訳なさを覚えていた。

「いえいえ、そんな」

「そーそー、ウチらなりの生活リズムだし？」

「気にしないで」

しかし何度言っても、彼女たちから返ってくるのはそんな言葉ばかりだ。

（うーん、どうやって説得すりゃいいんだろうなあ……？）

考えてはいるが、今のところ上手い案は浮かんでいなかった。

「……ふう」

キッチンへと向かう途中、無意識に溜め息が漏れる。それは説得方法が浮かばないことへの憂慮……という部分もなくはないが、単純に疲労によるものが大きかった。慣れているとはいえ、一日の三分の二程度に当たる時間を労働に費やすのは普通にキツイ。

「……？」

目頭を揉んでいると、ふと視線を感じてそちらに目を向ける。すると、伊織が春輝の方をジッと窺っている様が見て取れた。その目に、心配げな色が宿っているのがわかって。

「いやあ、にしても良い匂いだ！ 今日のおかずは何かなあ？」

春輝は、努めて明るい声を上げた。

勿論露骨な誤魔化しであり、伊織の目は変わらず春輝を見据えたままだった。



『「ちそうさまでした」』

四人揃って手を合わせ、食事を終える。

「今日も美味かったよ、小桜さん」

「お口に合ったのなら良かったです」

そんなやり取りも、もうお決まりのものとなっていた。

（よし、今回も噛まずに言えたな……サラッと女の子を褒めるイケメンキャラのように）  
もつとも春輝は、内心ではこの手のことを口にする度にちよつとドキドキしているのだ。なにしろ、こんな距離感で女性と接した経験などほとんどないのだ。

「そんじゃウチ、洗い物片付けるわー」  
「わたし、お風呂入れてくる」

露華と白亜が、それぞれ流し台と風呂場の方へと向かっていく。いつもなら、伊織も二人を手伝うなり他の家事を行うなりするのだが。

「あの……春輝さん」

今日は、リビングへと向かう春輝の後を追いかけてきた。

「うん？ どうかした？」

「えっと、その……」

なぜだか、歯切れ悪く言い淀んだ後。

「お疲れです、よね？」

「ははっ、なんだよ急に」

出てきた言葉に、春輝は軽く笑う。ここでも極力明るく、疲れは見せないように。

「私、朝からバイトに入っている時は定時で帰りますし、夕方からの時も短時間で上がるので……春輝さんが毎日こんな遅くまで頑張っ（がんば）っていらっしやるなんて知らなくて……それで、何か力になれないかと思ひまして……」

「いや、小桜さんは今でも十分に力になってくれてるよ。ていうか、バイトにそこまで

色々と任せちゃうわけにもいかないし」

「あ、いえ、お仕事でお役に立ちたいというのも勿論（もちろん）なんですけど……今のこの環境（かんぎょう）だからこそ、出来ることをしたいと言いますか……」

「……？」

要領を得ない物言いに、春輝は首を捻（ひね）る。

「ですので……」

迷うように一度ずつ左右に視線（ざんせん）を彷徨（さまよ）わせた後、何やら伊織は決意したような表情に。

「どうぞ！」

そして、その場に正座して春輝に向けて両手を広げた。

「……はい？」

意味がわからず、春輝は先程（さきほど）より大きく首を捻（ひね）る。

「膝枕（ひざまくら）です！」

「…………はい??」

なるほど、つまりその体勢は膝枕の準備ということなのだろう。

意味はわかったが意図がわからず、春輝の頭の上に沢山（たくえん）の疑問符（ぎもんごう）が浮かんだ。

「……あれ？」

おかしいな？ とばかりに、今度は伊織の方が首を傾げる。

「膝枕です！」

そして、先程のリブレイのように同じ言葉とポーズを繰り返した。

「いや、別に聞こえてなかったわけじゃなくて」

春輝の口元が思わず半笑いを形作る。

「なんで、膝枕？」

「私の膝枕は、効果抜群ですよ！ 露華や白亜にも、疲れが取れると評判です！」

疑問を投げげると、伊織はドヤ顔でボンボンと自身の膝を叩いた。

「あー……気持ち好啊いけど……」

「……私では、膝枕役も務められませんか？」

やんわり断ろうとすると、とても悲しげな顔をされて。

「……………じゃあ、ちょっとだけお願いしようかな」

結局、春輝の方が折れた。

「はいっ！」

一方の伊織は、パツと満面の笑みを浮かべる。

「……それじゃ、失礼して」

「はい、どうぞっ！」

手早く終わらせようと、仰向けになってそっと伊織の腿の上に後頭部を乗せる。

（うおっ!）

すると、まず訪れたのは驚きであった。

（か、顔が見えん……）

高く隆起した『遮蔽物』によって、伊織の顔が視界に入ってこなかったためである。

「どうですか？」

「あ、ああ、凄いな……」

それが喋りかけてきたように見えて、つい思っていたことがそのまま口をついて出た。

「ふふっ、そうでしょう？」

春輝の言葉を膝枕への感想と受け取ったらしく、伊織の声は嬉しげに弾んでいる。

「よしよし、いい子ですねえ」

その回答に気を良くしたのか、次いで伊織は春輝の頭を撫でてきた。

「毎日頑張ってる偉いですよ」

幼児を相手にするかのようないい感じに、春輝の口元に苦笑が浮かぶ。

「いつも遅くまで、大変ですねえ」

けれど。

「……あれ？ 意外とこれ、馬鹿に出来ないのでは……？」

次第に、そんな風に思い始めてきた。

「皆さん、春輝さんのことを頼りにしてますよお」

後頭部の柔らかい感触に、優しい声。頭を撫でてもらうのなど子供以来で……だからこそ、酷く懐かしく感じられて。身体が次第にリラックスしていくのを自覚する。

「いつだって皆の期待に応えて、凄いですねえ」

なんだか、ゆつたりと時間が流れていくように感じる中。

「……でも、無理はしないでくださいね？」

その言葉は、やけに切実な響きを伴って聞こえて。

（心配、かけちゃってるんだなあ……）

ほんやりする頭の中に、そんな実感が広がっていった。

「……ありがとう、凄いなったよ」

「あつ……」

本心からの言葉と共に身を起こすと、伊織がどこか名残惜しそうな声を出す。

「遠慮なさらず、もっと続けていただいても大丈夫ですよ……？」

「いや、十分リラックス出来たから。おかげで、明日はいつも以上に頑張れそうだよ」

実のところ、もう少しあのままでいたかったという気持ちが無かといえは嘘になる。

しかし、伊織に負担をかけるのは良くないだろうという想いと……あとぶっちゃけ、あまり続けると戻ってこれなくなりそうな予感がしたゆえの固辞であった。

「……そんな心配すんなって」

未だ気遣わしげな伊織に、ニッと笑って見せる。

「残業だって、ある程度は好きでやってるわけだしさ」

「そう……なんですか？」

春輝の言葉に、伊織は小さく首を傾けた。

「ああ。ウチの会社、残業代がフルに出るって意味ではホワイトだから。業務調整さえすれば別に定時に帰るのだから余裕なところを、あえてやってるわけよ」

この言葉も、必ずしも嘘ではない。ただ、春輝に業務調整を行う気があまり無いだけの話である。とはいえ実際、用事がある日には定時退社することだってあるのだ。トラブルさえ発生しなければ、という条件は付くが。

「俺だって、これで社会人六年目だ。体調管理も仕事のうちだってわかってるよ」

これも、少なくとも言葉の上では本当だ。わかっているからといって実際に実行してい

るとは限らない、というだけで。それに、丈夫に生んでもらったらしく今のところ不調らしい不調を抱えていないのも事実である。

「なるほど……そうですよね」

ようやく、伊織の表情に納得の色が浮かんだ。

「すみません、差し出がましいことを言いました」

「いやいや、気持ちは嬉しいよ」

ペコリと一礼する伊織の頭が上がってきたところで、そこにボンと手を置く。

「ありがとな」

「い、いえ、そんな！」

お礼を言いながら頭を撫でると、たちまち伊織の顔は真っ赤に染まっていった。

「お姉ー、洗剤の替えてあったけー？」

とそこで、キッチンの方から露華が顔を出す。

「……っと」

春輝と伊織を認めると、少しだけ意外そうな表情を浮かべて。

「おやおやあ？ これは、お邪魔してしまいましたかなあ？」

すぐに、それがニンマリとした笑みに変わった。

「も、もう！ からかわないの！」

赤い顔のまま、伊織が露華へと抗議を送る。

「えと、洗剤だよね？ それなら……あつ、春輝さん失礼しますね」

それからもう一度頭を下げた後で立ち上がり、キッチンの方に駆けていった。

（……しまった。なんかナチュラルにやつちまったけど、今のは完全にセクハラだったよな……？ 主人公気取りとかやめとけよ、俺のキャラじゃないんだからさ……）

伊織の頭に乗せていた自らの手を見つめ、今更ながらに自戒の念を抱く。

「ねえねえ、春輝くん。今さ、膝枕してもらってたんでしょ？」

そんな春輝へと、なぜかリビングに残ったままの露華が身を寄せてきた。

「お姉の具合、どうだった？」

次いで、ニヤニヤと笑いながら問いかけてくる。

「……変な言い方するなよ」

妙にいやらしく聞こえる発言に、とりあえず春輝は苦言を呈した。

「まあ、その、良かったけど」

そして、視線を逸らし頬を指で掻きながら答える。

「にひひ、そうっしょ？ 完全にお金取れるやつだからね、お姉のアレは」

膝枕サービスを提供する商売もあると聞くし間違っではないのだろうが、いちいちいやらしく聞こえるのはなぜなのか。

「で・も」

春輝の耳元に口を寄せて、露華はどこか妖艶な調子で囁く。

「実は、ウチのも結構いい感じなんだよお？ 春輝くんだったら、タダでしてあげてもいいんだけど……お客さん、今度一発どう？」

「あのなあ……」

どこからツツコミを入れるべきかと、迷っていたところ。

「……何か、えつちな話をしてる？」

通りがかりでその場面を目撃したららしい白亜が、ジト目を向けてきた。

「ふふーん、実はねえ……」

「こら露華ちゃん、白亜ちゃんの教育に悪いだろうが！」

「やっぱり、教育に悪いことを話してたんだ……」

「誤解だ!？」

「露華ー？ 洗い物の続きちゃんやりなさーい！」

「はいはい、今いきまーす！」

なんて。

つい数日前までは考えられなかったドタバタと共に、人見家の夜は更けていく。



といった出来事があった翌日、定時を少しだけ過ぎた頃のことである。

「人見くうん」

のっしのっしと、椀山課長が大きなお腹を揺らしながら春輝の元を訪れた。

「悪いんだけど、今度のお客さんへのプレゼンで使う用の資料作っといてくれる？ 新システム構成について説明するやつ。ペラ一枚でいいから」

「はい、わかりました」

椀山課長からの依頼を、春輝は軽い調子で引き受ける。

頭の中で、手持ちの作業を並べてこの後のスケジュールを試算。

（あと、今日やる予定だった作業は……桃井のソースレビューだけか。今から両方片付けでも、まあ終電にはたぶん間に合うだろう）

そう結論つけたところで、ふと前夜のことを思い出した。

——でも、無理はしないでくださいいね？

伊織の声が、脳内で再生される。

「……あの。その資料、明日で大丈夫ですよ？ 今日ほもう上がろうと思うんですが」

「へ？」

尋ねると、樫山課長の呆けた声と顔が返ってきた。

「ああ、うん。勿論、大丈夫だけど……」

若干戸惑い気味なのは、春輝の確認が予想外だったためだろう。

実際、これまでの春輝であれば何も聞かず作業に入っていたところだが。

(あんだけ言つという今日も終電じゃ、また心配かけちゃうだろうしな)

昨日の自分の言葉を想起して、思い直した形である。

「桃井、この後で予定してたレビューって確か急ぎのやつじゃなかったよな？ 悪いけど、

明日に回してもらってもいいか？」

「え、ええ、構いませんが……」

ちようと通りかかった貫奈にも確認すると、彼女はパチクリと目を瞬かせた。

「……先輩、今日も『大したことない野暮用』ですか？」

次いで、先日春輝が口にした言葉を用いて尋ねてくる。

「そう……ああ、いや」

頷きかけて、春輝は首を小さく横に振った。

「割と大したことのある……日常、かな」

「……？」

なんとなく思ったことを口にする、貫奈が小首を傾げた。



樫山課長への言葉通り、それからすぐに帰路に就き。

「ただいまー」

いつもより幾分軽い肩を動かして、春輝は自宅の玄関を開けた。

「あれっ!? 今の声、もしかして春輝クン!?!」

「……タイミング、最悪」

リビングの方から、何やらバタバタとした気配が伝わってくる。

「……？ 何かあったのか？」

若干疑問を覚えながらも、春輝はリビングに向かってその扉に手を掛ける。

「あっあつ、春輝さんちよつと待……!」

中から伊織の慌てた声が聞こえてきたが一瞬遅く、リビングの扉は開いて。

「……………うおっ!」

目に飛び込んだ光景における肌色率の高さに、春輝は思わず目を剥いた。

「きゃっ!」

「ちよ、ちよっと春輝クンさあ……………!」

「……………えっち」

どうやら着替え中だったらしく、三人共が中途半端に制服を着た状態だった。伊織と露華は胸元を手で隠そうとしているが、慌てているせいかちゃんと隠せていない。というか伊織に関してはむしろ胸元が強調される形になっていた。白亜は比較的上手く大事なところを隠せていたが、春輝の方にジトツとした目を向けてきている。

「す、すまん!」

慌てて身体を反転させ、後ろ手でリビングの扉を閉める。

(早く帰るなら帰るで、ちゃんと連絡すべきだったな……………)

今更ながらに、そんなことを思う春輝であった。

(つーか、ラッキースケイベントって現実に発生するもんだったのか……………実際に遭遇すると、嬉しさとかより罪悪感の方が遥かにデカいな……………)

気まずさを胸に、ひとまず自室に向かおうとしたところ。

「……………つと。これ、届いてたのか」

部屋の前に、通販サイトのロゴが印字されていた段ボール箱が置かれていることに気が付いた。どうやら、春輝が不在の間に届いた荷物を誰かが置いておいてくれたようだ。

「……………今のうちに、放り込んでくか」

気分を落ち着かせるのも兼ねて、春輝は奥まった位置に存在する部屋へと足を運ぶ。

春輝が『オタク部屋』と呼んでいるそこは、かつてその名の通りオタク活動に勤しむための部屋だったのだが。今や、日々届くグッズを陳列するだけの空間となっていた。

「つーか、何だったっけこれ……………? ブルーレイ……………『キスから始める魔法少女』? ……ああ、小枝ちゃんがメインヒロインやってる深夜アニメか」

もはや自分で何を注文したのかすら曖昧で、段ボールを開封しながら苦笑する。

「買ったはいけれど、観るかなあ……………? ネットに上がってたダイジェスト版は観たし、もういいかな……………どうせちゃんと観る時間なんて取れないだろうし……………」

独り言と共に、小さく溜め息を吐く春輝。社会生活の中では碌にオタク活動も出来ず、室内には開封すらしていないものも多数存在した。社会人になりたての頃に奮発して購入した大型のモニタも、今や虚しく埃を被っている。

そんな様を時折眺めては一人虚無感を覚えるのが、春輝にとっての日常。

ただし、それは……数日前までは、の話である。

「いやあ、はっはー。春輝くん、さっきは見事なラッキースケベだったねー」

思考の海に沈んでいた春輝はこの家に他の人間がいることを失念しており、後ろから聞こえた声にビクッと身体を震わせた。

「それとも、もしかして狙って……って、およ?」

春輝が固まる中、軽く上半身をズラして露華がオタク部屋の中を覗き込む。

「おー、壮観って感じー?」

感心したような声に、春輝の背にブワツと嫌な汗が流れ出した。

蘇ってくるのは、十年以上前の記憶。クラスメイトたちの嘲笑だ。

「あつ、これ知ってる。ヒロインが主人公とキスするとパワーアップするやつだよね?」  
しかし予想していた、馬鹿にするような声は訪れず。

「確か、こんな感じでやるんだよねえ……?」

「ちよ……!?!」

イタズラっぽい表情で顔を寄せてくる露華に、春輝は動揺して仰け反った。

「おわっ!?!」

「きゃっ!?!」

その拍子にバランスを崩し、咄嗟に掴んでしまったのは露華の肩。

結果、ドスンと音を立てて二人して廊下に倒れ込むことになった。

「痛え……って、あれ……?」

身体を起こそうと手を伸ばすと、何やらふにょんとした感触が返ってくる。

「は、春輝くん、手……!」

だいぶ嫌な予感を覚えつつそちらに目を向けると、己の手が露華の胸をガッツリ掴んでいる光景が。もう少し視線をズラすと、真っ赤になった露華の顔が目に入ってくる。

「露華ー? 今の音、どうしたのー?」

と、そこでリビングから伊織が顔を出した。

「……って」

そして、春輝と露華の方を見て固まる。

「露華、貴女また……!」

「もしかして、お姉の中には『体勢』って概念が存在しないの?! どこからどう見てもウチが襲われている側っしょ今回は!」

「そんな、春輝さん……!」

「待て、事故だ事故!」

露華に疑わしげな目、春輝に嘆きの目を向けてくる伊織に、二人であわあわと返す。

「……これ」

他方、そんなやり取りには我関せずといった様子でトテト歩いてきた白亜が、春輝の手にあるブルーレイのパッケージに目を向けた。

「キスマホ……しかも、初回限定盤の特別仕様のやつ」

表情の変化こそ少ないながら、その目はどこかキラキラしているように見える。

「……白亜ちゃん、知ってるの？」

「うんっ、この期だと一番好きだった」

立ち上がりながら尋ねると、白亜はやや鼻息も荒く頷いた。

「そーいや、露華ちゃんも知ってるようだったけど……」

「ウチは白亜の付き合いたい感じが観始めたんだけどね。普通に面白かったよ」

春輝に少し遅れて立ち上がり、露華は未だ少し赤い顔を逸らしながらもそう言う。

「じゃ、じゃあ、この部屋を見ても引いたりしない……のか……？」

「？ 引くというと、何にでしょう？」

恐る恐る尋ねてみると、伊織が不思議そうに首を傾けた。

「ウチらは、ほら、白亜が割とガチ気味だから」

「わたし、ガチ勢」

何やら察した表情の露華に頭を撫でられ、白亜はなぜか誇らしげに胸を張っている。

「でも、ロカ姉も凄い。わたしのコスプレ衣装を作ってくれる」

「へえ、そうなんだ？」

白亜がコスプレをするということと、その衣装を露華が作るということ。どちらも思ってもみなかった事実で、二重の意味で驚きであった。

「ふふん。これでウチ、けっこう女子力マシマシよ？」

自身を手の平で指した後、露華はニンマリ笑って春輝に身を寄せる。

「夜の方も……ね？ そろそろ襲いに来てくれてもいいんだよ、春輝くん？」

「もう、露華！ すぐにそういう話を持っていかない！」

今回のからかい対象は、春輝というよりは伊織なのか。

顔を赤くする伊織を見て、露華はニヤニヤと笑っている。

（つーか、露華ちゃんも口で色々と言う割には結構純情だよな……）

先程の赤面を思い出してそんなことを考えていると、ツンツンと腕をつつかれた。

「お兄さん……中、入ってもいい？」

「ん？ ああ、お好きにどうぞ」

領いて返すと、白亜はどこかソワソワとした様子で早速室内へと足を踏み入れる。

「ふおお……!!」

そして、感嘆かんたんと思しおぼしき声を上げた。

「これは、お宝の山……!!」

先程以上にキラキラと目を輝かせて、忙しなく室内を見回している。

「特にこの辺りの、小枝ちゃんグッズ……小枝ちゃんのデビューシングルから、今までに出たシングルもアルバムも全部揃ってる……しかも、初回限定盤や特装版もコンプリート……抽選ちゆうせんでないと当たらないサイン色紙まで……? これは、今から手に入れようと思ったらお金を積んでも可能かどうか……」

「おつ、わかるかね?」

白亜の称賛しょうさんに、春輝のオタク部分が顔を覗かせてきた。

「というか白亜ちゃん、もしやお主も?」

「イエス……若輩じやくはいの身ながら、コエダーの末席に名を連ねる者」

ちなみに、『コエダー』というの葛巻小枝ファンが自分たちのことを指す俗称ぞくしやうである。

春輝と白亜、しばらく二人で見つめ合い。

「……同志よ」

やがてどちらからともなく手を差し出し、固い握手あくしゆを交わしあった。

「あーいうノリは、ウチらにはよくわかんないよねー」

「あ、はは……」

露華と伊織が苦笑を浮かべる中、ふいに白亜が視線をズラす。

「……これは? こんなユニット、あったっけ……?」

その目は、小枝ちゃんグッズの棚たなに置かれた一枚のシングルCDへと向けられていた。

「ほう、そこに気付くとはお目が高い」

春輝はそのCDをそっと手に取って、白亜に手渡す。ジャケットには数人の女性が写っており、パッと見では取り立てて特徴とくちょうもないアイドルソングといったところだ。声優が出すCDとしてはあまり見ないタイプのデザインだが、それもそのはず。彼女たちは、声優ではないのだから。端の方に写っている葛巻小枝だって、『当時』はまだ。

「これは、小枝ちゃんが声優に転身する前に所属してたアイドルユニットのCDなんだ」

「……初耳。小枝ちゃんに、そんな経歴が?」

「ぶっちゃけ、本能的にも若干じやくかんの黒歴史感があるみたいだしね。アイドルつつつても地下アイドルだし、このCDだって手売りで数十枚売れたって程度らしい」

「つまり……激レア?」

「ああ。小枝ちゃんが声優としてデビューした頃に手に入れたやつだから、当時は捨て値だったけど。今じゃ、数十万円はくだらないな」

「数じゅ……!? わわっ!?」

絶句した様子の白亜はCDを取り落としかけ、あわあわと両手で受け止める。

「ま、いくら積まれたって手放す気はないけどね」

「か、返す……!」

震える手で差し出してくるCDを受け取ると、白亜はホッと安堵の息を吐いた。手にしたCDを眺め、春輝は目を細める。

「小枝ちゃんの原点だけあってか、熱が凄いなだよ。他の子たちと比べて一人だけ飛び抜けてるっつーか、必死さが現れてるっつーか……だから俺、いつの頃からか辛い時はこの曲を聞く癖が出来てたんだ。何なら、もうジャケッットを見るだけでもいい。そうしたらまた頑張れる気がしてさ。今は成功者に見えるこの子だってこんなに頑張ってきたんだからファンの俺が頑張らなくてどうする、っつena。今じゃ俺にとつて、一番の宝物だよ」

実際、これまでに何度もそうして辛い場面を乗り越えてきた。

比喩無しに、春輝はこのCDの存在に救われてきたのだ。

「お兄さん……」

白亜に呼ばれ、春輝はハッと我に返った。

「つて、なんか恥ずかしい話しちゃったな……」

苦笑して、自らの頬を掻く。

「そんなことない」

白亜が、ふるふると首を横に振った。

「お兄さんがそうやって頑張ってくれてるから、わたしたちはこうして無事に暮らしている。わたし、お兄さんに感謝してる……いつも、ありがとう」

そして、ペコリと頭を下げる。

「いやあ、いいこと言うねえ白亜。ウチも、日々全く同じことを思ってるよ」

「ロカ姉……妹の発言に便乗とは、恥を知るべき」

笑いながらペチペチ頭を叩いてくる露華の手を、白亜が鬱陶しそうに払い除けた。

「あのあの、勿論私も、日々感謝しておりますので!」

出遅れたためだろうか、伊織が慌てた調子でペコペコと何度も頭を下げてくる。

「いや、そんな改めて言う必要ないから……」

苦笑を深め、春輝は手を振った。

「ところで、お兄さん」

と、白亜が再び見上げてくる。  
それから、上目遣いで尋ねてきた。

「わたし、時々この部屋に来てもいい？」  
「勿論、いつでもどうぞ」

「ありがとう……！」

春輝が頷くと、白亜はニパツと笑った。

同居して数日、初めて彼女の心からの笑顔を見た気がした。

「お兄さん、あと、その……」

そこから一転、モジモジと何やら言いづらそうに俯いてしまう。

「どうした？ 遠慮せずに、何でも言ってくれていいぞ？」

「なら……」

春輝が促すと、少し赤くなった顔を上げた。

「お兄さんのこと……ハル兄、って呼んでもいい？」

「ん？ 初日にも言った通り、好きに呼んでくれて構わないさ」

正直少し拍子抜けした気分で、春輝は軽く頷く。

「おお……」

「白亜が、懐いた……」

「……二人共、失礼。わたしは、同志に敬意を表しただけ」

姉二人の感嘆に、白亜はふくれっ面を返した。

「ああでも、代わりに……って、わけでもないんだけど。今度、白亜ちゃんのコスプレ姿が見てみたいかも。きつと可愛いんだろうな」

「か、可愛いなんて、そんなこと、ない……」

顔を赤くして俯く様も、初めて見る類のものだ。

「春輝クンって、やつぱり……」

「い、いや、あれは父性的なものだよ……た、たぶん……」

ヒソヒソと囁き合う二人の声は、聞こえなかったことにした。

「でも、ごめんなさい。コスプレ見せるのは、無理……衣装、持ってきてないから……」  
「いやいや、謝るようなことじゃないって。こっちこそ変なこと言っごめん」

ペコリと頭を下げてくる白亜に、春輝は笑って手を振る。

「そうだな、考えてみればウチに来た時からほとんど荷物持ってなかった……し……」  
言葉の途中で、春輝とは重要な事実が気付いた。

目の前の白亜を見下ろす。

制服姿である。

振り返って、伊織と露華に目を向ける。

勿論、制服姿であった。

「……………」

春輝の視線を受けて、疑問符を浮かべる三人……その全員が、制服姿なのである。



「そんな……！ 春輝さん、やめてください……！」

「いいや、やらせてくれ！ じゃなきゃ収まらない！」

なんてやり取りをする伊織と春輝、そして露華と白亜は。

「女の子なら、ヘアアイロンとかも必要なんだろう？ せっかくだし、ドライヤーもいいやつ買うか。そうだ、四人分だと洗い物も大変だろう？ 食器洗い機も買っちゃおう」

四人揃って、ショッピングモールを訪れていた。

小桜姉妹が私物らしい私物を持っていないことによく気付いた春輝が、急遽決めた形である。制服も洗濯して着回していると知って、服屋へ……と思ったのだが、せっかくなのでこの機会に必要なものを全部買い揃えてしまおうという魂胆であった。現在は電気

屋にて、春輝が製品番号を示す札を気軽な表情でヒョイヒョイと手に取っている。

「確か、もう春休みも半分くらい過ぎてたよな？ てことは、文房具とかも買わないとだよな……あつ、つーか歯ブラシとかはどうしてるんだ？」

「その程度の小物は持っていたので……って、そうではなくて！」

軽快な調子で歩く春輝の前に、伊織が立ちほだかった。

「私たちは、住まわせてもらってるだけで十分です……！」

「そうは言っても、今まで無くて困ったものとかあったら？」

「そ、それは、まあ、その……」

嘘のつけない性格である伊織が、そっと目を逸らす。

「ごめんな、今まで気付かなくて」

「いえ、春輝さんに謝ってもらおうようなことでは！ それに今でも十分良くしていただいますし、これ以上は……！」

「まーまー、いいじゃんお姉。買ってくれるって言ってるんだしさ」

春輝と伊織の会話に割り込んだ露華が、小さく肩をすくめた。

「このお礼は、カラダで……ね？ 春輝くん？」

「な、なるほど、身体で……！」

パチンと春輝へとウインクを送る露華に、伊織は顔を赤くしつつも大きく頷く。

「……家事で役に立って意味だよな？ な、露華ちゃん？」

「さあて、それは春輝くん次第かなあ？」

釘を刺しておく、露華は意味深に微笑んだ。

「というわけでお姉、遠慮なくおねだりしちゃおう！ ほら、こないだ包丁が切れにくいとか言ってたじゃん？ あとなんだっけ？ 大きめの鍋が欲しいとか？」

それから、ボンと伊織の肩に手を置く。

「ちよ、ちよっと露華……！」

「いやいや、こういうのは遠慮した方が失礼なんだって！ ねっ、春輝くん？」

「まあ、そうだな」

若干言わされた感もあるが、実際春輝としても遠慮は必要ないと思っていた。

「それじゃ、その……確かに新しい包丁やお鍋は欲しいので、次は金物系のお店に連れて行っていただけると嬉しいですよ……あとスポンジが足りないのと、ハンガーの劣化が激しいので、一〇〇均辺りで色々買い揃えたいですね……それからそれから……」

やはり色々と不足はあったらしく、伊織は視線を上に向けて指折り候補を挙げていく。

「わかった、順番に回っていいこう。途中で他に必要なものを思い出したら、遠慮なく言っ

てくれ。服選びは時間もかかるだろうし、最後にしようか」

「はい、それで構いません。お気遣いありがとうございます」

という感じで方針が決まったため、一同再び歩き始め……そこでふと、白亜が立ち止まったままであることに気付いて春輝は足を止めた。

「白亜ちゃん？」

「……あ、ごめんなさい。今行く」

呼びかけるとすぐに追いかけてきたが、その目が直前まで向けられていたのは。

「……Webカメラ？ 興味あるの？」

「ん……」

春輝の問いに、白亜はどこか恥ずかしそうに頷いた。

「配信者、ちよっと興味あったから……コスプレで配信とか、楽しそうかなって……」

「へえ、そうなんだ？」

少し前までであれば驚いたことだろうが、オタク趣味への造詣が深いという白亜の一面を知った今ではそこまで意外さも感じない。

「そんじゃ、これも買おつか。あとはヘッドセットかな？ パソコンは、俺のを使ってもらえばいいだろうし……確か動画編集系のソフトも入ってただろ」

だから、春輝は気軽な調子でWebカメラとヘッドセットを手を取った。

「ハ、ハル兄、流石にそれは……!!」

「いいっていいって、そんな高いもんでもないし」

あわあわと慌てた様子を見せる白亜の頭を、空いている方の手で撫でる。

「春輝くんって……」

「ふ、父性……父性的なものだから……」

ヒソヒソと囁き合う二人の声は、今度も聞こえなかったことにした。



一通り生活必需品の類を買った終え、女性向けアパレル店の入り口に来た一同。

「そんじゃ、カード渡すから好きな買ってきな」

と、春輝は自身のクレジットカードを差し出す。

庶民向けの店でここまで高価な商品がないことを知っているというのもあったが、無茶な使い方をするような子たちではないと思える程度の信頼はこの数日で築けていた。

「あ、はい……」

ここまで度々遠慮を見せていた伊織も、いい加減諦めたのか素直にそれを受け取る。

ただ。

(……なんか、ちよつと残念そう……か?)

その表情の意味が、春輝にはわからなかった。

「いやいや、春輝くんさあ。ここでこそ出番ってやつっしょ」

どこかイタズラっぽく笑う露華が、肘で脇を突いてくる。

「なんでだよ……服なんてそんな重いもんでもないし、男手はいらなくないか?」

「もう、春輝くんは女心ってやつがわかってないよねえ。服を選ぶなら、やつぱり男の人の

意見も欲しいと思っちゃうのが女子なわけよ」

「俺なんかの意見聞いたって仕方ないだろ?」

「……はあ」

首を傾げる春輝に、露華はこれみよがしに溜め息を吐いた。

その傍らでは、白亜が「やれやれ」と眩きながら肩をすくめている。

一方の伊織は、何やらチラチラと春輝に視線を送っていた。

「なんだよ、皆して……」

「いいから、行こっ! 美人姉妹のファッションショー、特等席で見れるんだよ!」

露華に引つ張られ、結局春輝も入店することとなる。

（女の子に引っ張られて、女性向けの服屋に入店……か。まさか、このイベントも現実には発生するものだったとはな……二次元って、実は意外と現実になかったりする……？）  
ほんやりと、そんなことを考えながら。

からの、店内で開催されたのはまさしく『ファッションショー』であった。

「ほら春輝くん、これ良くない？ 胸元も開いてて、お姉のセクシーさをアピール！」

「イオ姉にはやっぱり清楚系……ハル兄もそう思うでしょ？」

ただし、先程からモデル役を務めるのは伊織のみ。入店早々から、露華と白亜が競い合うように伊織に似合う服を見繕っていた。春輝としても、それ自体は構わないのだが。

「……なんでいちいち俺に判定させるんだ？」

その点だけが、腑に落ちなかった。

「それは……」

「ねえ……？」

姉妹でだけ通じ合うものがあるのか、二人は意味深に視線を交わし合うのみである。

「小桜さんも、俺なんか判断されても嫌だろ？」

仕方なしに、伊織の方へと水を向けてみた。

「いえ！ 私、春輝さん好みになりたいと思ってますので！」

しかしそんな力強い答えが返ってきて、ますます困惑することになる。

「……あつ、あつ、違います！ 間違えました！」

一瞬遅れて、伊織の顔が真っ赤に染まった。

「その、男性に好かれる感じになりたくて！ いえそれじゃ尻軽女みたいになっちゃう気もしますが、それも違ってですね！ 特定の男性だけでいいと言いますか！ 特定の男性と言っても気になる相手がいるわけではなくいやいやいわけでもないのですが……！」

「わ、わかったから、一旦落ち着こうか？」

伊織の目がグルグルと回り始めたので、その背を叩いて宥めにかかる。ぶっちゃけ、周囲の視線が気になった。ただでさえ、店内の客のほとんどが女性で少々気まずいのだ。

「そうだねお姉、とりあえずちよつと落ち着こうね」

「イオ姉、どうどう」

露華と白亜もそれに加わり、徐々に伊織の様子も平常モードに戻ってきた。

「す、すみません、取り乱しました……」

「ははっ……いいよ、気にしないで」

何度も見た光景に、実際いい加減慣れ始めている春輝である。

「そ、それより二人共、そろそろ自分の分を選んできなさい？　いつまでも春輝さんに付き合わせちゃうのも悪いでしょ？」

『はい』

伊織の言葉に素直に頷き、露華と白亜はそれぞれ店内へと散っていった。

「……ところで、春輝さん」

それを見送ってから、伊織はまだ少し赤い頬を隠すように両手の服を持ち上げた。それぞれ、先程露華と白亜が見繕ったものである。

「どっちの方が、好みですか？」

「……………俺個人で言うくと、白亜ちゃんを選んだ方かな」

しばしの沈黙を経て、春輝は露出の少ない方の服を指差した。

「なるほどっ！　じゃあ、こっちを買うことにしますねっ！」

すると、伊織はバツと笑みを輝かせて春輝が指した服を抱きしめる。

「いや、俺なんかの意見は参考にならない方が……」

「いえ、実は私もこっちの方が良いと思ってましたので！」

「そ、そう……？　それならいいけど……」

伊織が時折發揮する謎の押しの強さに、春輝としては頷く他なかった。

「それでは、店内にいるのも気まずいでしょうし後は外で待っていただければと」

「ん……？　まあ、ここまで来たら最後まで付き合うけど？」

「あ、いえ、その……」

言葉を濁し、目を背ける伊織……その視線の先を見て、春輝も察する。

「この後、ちよつと向こうの方もカバーしておきたいので……」

そこにあつたのが、下着コーナーであつたためである。

「そ、そうだよな！　それじゃ俺は、外で待つてるわ！」

頬が熱を持ったのを自覚しつつ、踵を返した……その、矢先のことであつた。

「……今、何やら先輩の声が聞こえたような」

店内に、知り合いの顔を見つけたのは。

（げえっ、桃井!?　小桜さん、見つかるとマズい！　とりあえず隠れよう!）

そんな思いを込めて伊織に目をやると、彼女も確信を持った表情で頷いてくれた。

共に暮らして数日、アイコンタクトで意思疎通を図れるまでになつていたようだ。

春輝は、素早くその場に屈んで陳列棚に並ぶ服で身を隠す。

一方の、伊織は。

「どうもこんにちは、桃井さん！」

と、貫奈の前に出て腰を折っていた。

「つて、なんで自分から見つかってんの!? 今の自信満々の顔は何だったんだ!」

共に暮らして数日、アイコンタクトで意思疎通を図れるまでにはなっていないようだ。

「あら小桜さん、こんなところで奇遇ね」

「はい、奇遇ですね! とても奇遇です! 思いがけない巡り合いという意味です!」

「なぜ辞書的な意味をわざわざ口に……?」

「やべえな、早くもテンパってるし桃井も訝しんでる……」

直接は見えずとも貫奈の声色からそう判断出来て、春輝の頬を冷や汗が流れた。

「その、ちょっと現国の復習をと思ひまして!」

「そう、それは感心ね。ところで、この辺りで先輩……人見さんを見なかった? さつき、声が聞こえたような気がしたのだけれど」

「全く見ていないです! 春……人見さん一人さえ一目とて見かけずです!」

「なぜちよっとラップ調に……? まあいいわ、やっぱり気のせいだったってことね。先輩に女の影……もとい、お付き合ひされている女性でも出来たのかと思っただけ!」

「あ、それはないと思います。春……人見さん、毎日真っ直ぐ帰ってらっしゃるので」

「……なぜ貴女がそんなことを?」

貫奈の口調が、どこか厳しさを伴ったものに変わる。

「途中までまあまあ上手くいったのに、なぜ最後にボコを出す……! ていうか桃井、なんでそんなに俺のことを掘り下げたがるんだよ!? 俺のこと好きか!」

図らずも真実に辿り着いている春輝だが、その事実には誰にもいなかった。

「あ、その……私の家、春輝さんのお住まいの近くで! よくお見かけするんです!」

「よし、今のはナイス機転だ小桜さん!」

「そうなの……? ……ところで小桜さん。さつきからちよいちよい言い間違えそうになってたけど、今のは完全に『春輝さん』って言ってたわね」

「と思つたら、脇が甘かった! ていうか、俺も慣れきってて違和感なかったわ!」

「それは、えーと……! あれです! そう呼びたいなって心の中で思ってたのがつい口に出ちゃった的な感じですよ!」

「なんだその言い訳は!? それじゃ誤魔化せないって!」

「……そう」

「……つて、あれ?」

「まあ、そういうこともあるわよね」

「(は? え? 通つた……? なんて……?)」

「えっと……もしかして、桃井さんも……?」

「……そうね。考えることはあるわ」

(ええ……? なんかわからないけど、女子的にはあるあるなのか……?)

「ところで、小桜さんはこの後何を見るの?」

「あ、はい。下着をいくつか」

「そう。なら、ご一緒してもいいかしら? 同性の意見も聞きたいし」

「はい、喜んで!」

(ま、まあ、とにかく誤魔化せたっぽいな……今のうちに移動するか)

腰を落として陳列棚に身を隠したまま、春輝は移動を開始する。

「……ちなみに小桜さん。それ、Fくらいあるの?」

「あつ、えっと、その……最近、Gに……」

直後、聞こえてきた会話に思わず足が止まった。

この会話の流れでアルファベットといえ、アレしかあるまい。

(A、B、C、D、E、F……)

指折り数えたところで、春輝はハッと我に返った。

(いかんいかん、早く離脱しないと……)

そして、再び足を動かし始める。

「まさか、Gとは……先輩は巨乳好きだし、油断出来ないわね……」

(なぜお前がそれを知っている!?! ていうか、油断出来ないって何だよ! 俺、女子高生

バイトに手を出すと思われてんのか!?)

何やら危機感に満ちた貫奈の声には、心の中でだけツッコミを入れた。



ともかくにも、どうにか貫奈に見つからないようアパレル店を脱出し。

春輝は、店の前のベンチに座って小桜姉妹が出てくるのを待っていた。

(さて、あとのくらくかかかな……)

時間を潰しながら他の場所で多少用事を済ませたりもしたが、まだまだ待つことになる

だろう。そう考えてスマホを取り出し、適当なサイトを閲覧し始める。

そうして、しばらくスマホの画面に目を落としていたところ。

「……わっ!」

「っ!」

間近で叫ばれ、春輝はビクッと震えて思わずスマホを取り落としそうになった。

「へへー、驚いた？」

顔を上げると、してやったりとばかりの顔の露華が目の前に。

「露華ちゃんか……」

まだ若干心臓がバクバクしているのを自覚し、春輝は苦笑を浮かべる。

「随分早かったな。ていうか、露華ちゃんだけ？」

それから他二人がいらないことに疑問を覚え、問いかけた。

「ん、ウチの分だけ先に選んでお会計してきたの」

と、露華は手にした袋を掲げて見せる。

「春輝クン、寂しがつてるかなーって思ってたね」

そして、ニッと笑いながら上半身を寄せてきた。

「どう？ 寂しかったでしょお？」

その際に、大胆に開いた胸元から下着がチラツと見えて。

「ろ、露華ちゃん、見えちゃってるから……！！」

「……ふえっ!？」

春輝が慌てて目を逸らすと、露華は可愛い叫び声を上げる。

「……ふ、ふふっ。やだなあ、春輝クン。こんなの、見せてるに決まってるじゃん？」

反射的といった感じで身体を引く仕草を見せた露華だが、しかし口元に笑みを浮かべたかと思えばむしろ更なる前傾姿勢を取り始めた。

「そう……」

それを横目に、春輝はもう少し大きく目を逸らす。

「やっだ春輝クン、照れちゃってる？ 照れちゃってるう？ 春輝クンって、結構純情だねえ。あんまりオンナ慣れしてないって感じい？」

「うん、まあ……」

「大体さー。春輝クン、ウチの恥ずかしいとこなんて出会ったその日にもうほとんど全部見ちゃってるでしょ？ この程度で動揺するなんて、今更ー」

「うん、まあ……」

「ほらほら、もつと見てもいいんだよお？」

「うん、まあ……」

定型で返しながら、春輝は視線を下げないように意識しながら露華の顔を窺い見る。

「ていうか、恥ずかしいならやめとけば？」

「……………はい」

赤い顔にヒクヒクときこちない笑みを浮かべていた露華は、小さく頷いてから笑みを消

して胸元のボタンを一つ留めた。

「……あ、ああ、そうだ」

若干気まずい空気を払拭すべく、春輝は話題を変えることにする。

「これ、良ければ貰ってくれないかな？」

ポケットから取り出したのは、とあるアクセサリーブランドの紙袋である。

「……え、何？ 春輝くん、本格的にウチのこと買っちゃう系？」

前置きがなかったせいか、露華はパチクリと目を瞬かせた。とはいえ本気の口調でないのは、春輝がそういうことを意図する人間ではないともうわかっているからだろう。

「店の前通った時に視線で追ってたからさ。欲しいのかな、って。違ってたらごめん」

「……春輝くん、意外と細かいとこまでよく見てるよね」

とりあえず勘違いではなかったようで、春輝は内心で安堵の息を吐く。

「でも、だからってプレゼントって発想にはならなくない？ ただでさえウチ、今日は好き放題欲しいもの買ってもらったわけだしさ」

実際、今日の買い物を通して露華はあれが欲しいこれが欲しいと言いまわっていたけれど。

「でもそれは、全部生活に必要なものだろ？ 君自身が欲しいものは一つも言っていない」

実は結構抜けたところもある伊織をフォローする形で、彼女が見落としていたものを露華が指摘するという構図が続いていたのだ。

「だって、今日はそういう趣旨じゃん？」

納得いかないのか、露華は眉根を寄せている。

「そうなんだけどさ。なんつーか……君、いつも気い遣ってるだろ？」

「はえ……？」

しかし春輝の言葉に、再び目をパチクリさせた。

「お姉さんが気付かないところのフォローしたり、自分がしたいことより白亜ちゃんを優先したりとかさ。今だって、ホントはもつと時間をかけて選びたかったのに俺が退屈しないようにって早めに切り上げてくれたんじゃないか？」

奔放に見える露華ではあるが——そして実際、そういう部分があるのも確かだが——その実、いつも人のためを思って行動していることを春輝は知っていた。そもそも初日からして、姉妹を守るべく自分の身体を差し出そうとしてきたのはまだ記憶に新しい。

「だから、これはお礼……というより、ご褒美？ っていうと、ちよつと偉そうかな」言葉の途中で少し恥ずかしくなってきた、春輝は苦笑気味に頬を掻く。

「……ちょっと、春輝くんさあ」

春輝が差し出す紙袋を受け取り、露華は自身の顔を隠すようにそれを持ち上げた。

「やめてよ、そういうの……ウチのキャラじゃないし……」

紙袋の向こうに見える顔は、真っ赤に染まっている。

「ま、なんだ」

春輝は、軽く肩をすくめた。

「姉妹のことばっかじゃなくてさ、たまには自分の欲しいものを素直におねだりしてもいいんだぜ？ 露華ちゃんも、まだ子供なんだからさ」

ぼんぼん、と露華の頭を撫でる。

「……だから、子供じゃないんですけどお」

抗議の声は、いつもより少し弱々しく聞こえた。

「大人ぶってるうちは子供なんだっての」

引き続き、頭を撫でながら喋る。

「その気遣いは偉いし、正直言えは助かってる部分も大きいけどさ。今は、大人が……俺がいるんだ。ちょっとくらいは甘えてくれ」

「……春輝くんらしからぬカッコつけ」

「ぐむ……」

自分のキャラと合わぬことをしている自覚はあったので、呻くしかなかった。

（やっぱ、痛い行動だったか……まあ、そんな気はしてたけど……プレゼントとか頭を撫でるとか、モブキャラな俺がやつてもキモいだけだもんな……）

春輝が内心で反省する傍ら。

「……だけど」

紙袋を開けて、露華がその中身を取り出す。出てきたのは、トップに花の意匠がデザインされたネックレスだ。軽く俯いた状態でそれを自身の首に付けて、露華は顔を上げた。

「ありがと、嬉しいよ」

そこに浮かぶのは、はにかむような笑み。よく見せる、からかう調子のもとは違って……素直に笑っている、という感じだ。そうしていると、いつもより幾分幼く見えた。

（この子も、こんな風に笑うんだな……）

何とは無しに、そんなことを考える。

（一緒に暮らしても、まだまだ知らない面つてあるもんだなあ……）  
当たり前前のを、今更ながらに改めて思った。

「……ね、春輝くんってさ」

視線を落としてネックレスのヘッドを弄りながら、露華がポツリと眩く。

「ん？ 何？」

「お姉のこと……」

空気に溶けていくかのような声は、辛うじて春輝の耳に届く程度の大きさだ。

「……いや、やっぱ何でもない！」

それが突然、いつも通りの声量に戻った。

「なんだよ、気になるな」

「んふふう、女の子には秘密が付き物だから……ね？」

顔に浮かぶ笑みも、すっかりイタズラっぽいものとなっている。

「ところで春輝くん、お姉にも何かプレゼント用意してるんだよね？ 白亜も実況者セツ

ト買ってもらったわけだし、お姉だけ何も無しじゃ可哀相だよ？」

「ああ、肩凝りが酷いって言ってたからマッサージグッズを一応買っと思ったけど……」

「おお、いいチョイスだねえ。にひひ……お姉、ぶら下げてるものが大きいからねえ」

「なんかオヤジ臭い言い方だな……」

「春輝クンに合わせたんだけど？」

「いや、俺はまだ『お兄さん』の範疇だから……」

「……………うん、そうだね。春輝くんは、お兄さんだよね」

「おい、なんか優しい目で言うのはやめて差し上げる！ 普通に傷つくから！」

「あつはー、冗談だつて！ 大丈夫大丈夫、春輝くんはちゃんとお兄さんだからさ！ ウ

チ、春輝クンとだったら全然付き合えるしねっ！」

「まあ、それは俺の方が無理だけど……」

「ちゃんとフォローしてあげたウチに対して何なのその仕打ち!？」

なんて。それは、先の一件などなかったかのようなあまりにいつも通りのやり取りで。

(……知らない面つつーか、女の子のことは俺には一生わからんかもな)

内心で、お手上げのポーズを取る春輝であった。

◆ ◆ ◆  
 そうして買い物を終え、帰宅しての夜。

「ふう……結構疲れたなあ」

風呂場にてシャワーを浴びながら、春輝はそんなことを呟いていた。

「……あつ、ボディソープ切れてる」

身体を洗おうと腰の辺りにタオルを広げたところで、その事実気付く。

「そういや、昼に露華ちゃんが言ってたっけか……」

ちゃんとこの点を認識していた露華が、詰替え用のボディソープを買っていたことを思い出した。にも拘わらず頭から抜け落ちていた自分の迂闊さを呪う。

「春輝クーン、ボディソープの替え持ってきたよー」

しかし折よく、脱衣所の方から露華の声が聞こえてきた。

「ああ悪い、助かったよ」

ドア越しに聞こえてくる若干くぐもった声に、安堵の声を返す。

（甘えてくれ、なんて言ったその日にこれじゃ格好がつかないな）

それから、軽く苦笑を浮かべた。

「ほんじゃ、いくよー」

「うん」

浴室扉が少し開く。その隙間から、詰替えパックを持った手が伸びてきた。春輝は手を伸ばし、それを受け取……ろうとしたところで、なぜか勢いよく扉が全開となる。

「おっじゃまします！」

そして、健康的な肌色が春輝の目に飛び込んできた。

露華である。

身体にはバスタオルが巻かれているが、逆に言えば他の部分は全て露出している。

「ちょ、何してんだ!？」

あまりに想定外な状況に、春輝の頭からは目を逸らすという選択肢すら抜け落ちていた。腰に広げたタオルのおかげで、こちらの大事な部分も見えていないのだけが幸いか。

「せっかくなんで、お背中流しに来たよー」

「何の『せっかく』なんだよ!？」

「ほら、今日は色々買ってくれたしそのお礼的な？ さあさあ、遠慮せずに」

「いや、遠慮とかじゃなくて……!」

そんなやり取りをする中……ハラリ。露華の身体に巻かれていたタオルが解けた。

「あつ、ヤバ……」

露華は焦った声を出すが、それだけ。

重力に引かれてタオルは落下していく。

反射的にそれを掴もうとした春輝だがそれも空振り、露華は一糸まとわぬ姿に……。  
「なーんちゃって!」

ならなかった。

肌色率は更に上がったが、大事な部分はしっかりと布に守られている。

「実は、下に水着を着てたのでしたー！ ビックリしたでしょ？ でしょ？」

ニヒヒ、と露華はイタズラを成功させた子供そのままといった感じで笑う。

「春輝クンに喜んでもらおうと、密かに水着も買っ……て……」

かと思えばその声が徐々に萎んでいき、笑顔もなぜか真顔寄りになっていった。

そして、その真顔がどんどん真っ赤に染まっていく。

「……………」

何がどうしたのかと、春輝も露華の視線の先を追っていき。

「っ!？」

それが、自分の下半身から今にもずり落ちそうなタオル——露華のタオルを掴もうとした時にズレたのだろう——に向けられていることを知覚して、盛大に顔を引き攣らせた。

「げっ…………!？」

なんてやっている間に、ハラリとタオルが地に落ちる。

「っとお!？」

その直前、春輝は奇跡的なまでの反応速度を叩き出してタオルを引き戻した。

結果、大事な部分はどうにか晒されずに済んだ……はず。

晒されていないと思われる。晒されていないと信じたいところであった。





「むぐむぐむぐ……！ ごちそうさま！ 美味しかったよ、お姉！」  
残っていたおかずとご飯を高速で掻き込んで飲み込むと、露華は慌ただしく椅子を立ててキッチンを出ていく。結局、春輝とは一度も視線を合わせずじまいであった。その背中を一同見送って、しばらく。

「……春輝さん？」

伊織が、春輝の方に顔を向けてくる。

「露華と、えっちなことをしていたんですか？」

そこに浮かぶのは笑みではあったが、妙な威圧感が放たれているように感じられた。

「ははっ、そういえば食後のデザートにと思ってチョコを買ってあるんだった」

露骨に話題を逸らしながら、春輝も席を立てて冷蔵庫に向かう。

「二人共、甘い好きだろ？」

白々しい笑みと共にチョコレートの箱を取り出し、開封してテーブルに置いた。

「そんな、子供相手みたいな手で誤魔化せると思われているのなら心外です」

と、引き続き笑顔で威圧感を放ってくる伊織であったが。

「まあまあそう言わず、まずは一口食べてみ？ 美味しいからさ。ほら、あーん」

春輝がチョコを一つ手にとって差し出すと、キョトンとした表情となる。

「し、仕方ないですね。春輝さんにそこまでされては、食べないわけにもいきません」

そして少し顔を赤くして、「あーん」と口を開けた。

「はい」

そこに、一口大のチョコレートを放り込む。

「むぐ……ありがとうございます……むぐ……ですが、これで誤魔化されたとは決して

……むぐ……思わないで……ごくん……くださ……」

緩みかけた口元を無理矢理に引き締めているかのような表情で咀嚼する伊織。

「……………」

かと思えば、なぜか突然口を噤んで俯いてしまった。

「……小桜さん？ 大丈夫か？ 喉でも詰まらせたか？ 水飲むか？」

その急激な変化に戸惑った春輝は、オロオロと水の入ったコップを差し出す。

だが、伊織に受け取ろうとする気配はなく。

「……………」

しばらくすると、無言のままガバツと顔が上がった。

「……うふっ」

その口元が、へにゃつと緩む。

「うふふふふふっ！」

そして、声を上げて笑い始めた。

「あははっ！ 私は一体、何を怒っていたのでしょ！ 世界はこんなにも輝いているというのに！ さあ皆さん、一緒に笑いましょ！ あはははははははっ！」

「急にどうした!? えっ、このチョコもしかしてなんかヤバイやつだった!？」

虚ろな目で宙を見ながら哄笑を上げる様はどう見ても何かしらのアレな物質を摂取した人にしか見えず、春輝は慌ててチョコの箱を手取る。だが確かに封はされていたはずだし、どこにでもある普通のチョコレートだとは思えなかった。

「あー……」

白亜が、納得したような……あるいは、「やっちゃった」とでも言いたげな声を出す。

「ハル兄。そのチョコ、お酒入りのやつ?」

疑問の形ではあったが、どこか確信が込められているように感じられる問い。

「……確かに、入ってるけど」

箱の裏を見ると、原材料名の一覧にアルコールの名前が確認出来た。

「でもこんなの、ほんのちよっとだけだぞ……?」

今の伊織の状態も、『酔っている』と言われれば納得出来るものではある。が、そこま

でのアルコール量が含まれているとは到底思えず、春輝は眉根を寄せる。

「イオ姉はお酒激弱体質。ちよっとでも入るとこんな感じになる」

そう語る白亜の口調は、諦め気味のものであった。

「そ、そうなのか……? じゃあ、こうなった場合はどうすれば……」

「……ちよっさま」

対処法を聞こうとした春輝を遮り、白亜は手を合わせて席を立つ。

「そうなったイオ姉は寝るまで止めるのは不可能。イオ姉の口にお酒を入れた張本人であるハル兄は、責任を持って最後まで付き合うべき」

「ちよ……!？」

そして、引き止める間もなくキッチンを出ていってしまった。

「……逃げやがった」

その事実一つ取っても、今の伊織がどれほど厄介なのが察せられようというものだ。

「あははははっ！ どうしたんですか春輝さん、笑いましょよ！ あははははははっ！」  
 実際、これの相手をするのは超絶面倒くさそうであった。

「……………」

なんて思っていると、伊織はピタリと笑うのをやめてまたも俯いてしまった。

「……小桜さん？」

もしかして早々に眠ってくれたのか？ と、期待を抱きながら呼びかける。

「春輝ひゃん！」

だが、すぐにまた勢いよく顔が上がった。その目は、完全に据わっている。

「春輝ひゃん！ そこに座りなひゃい！」

「あ、はい……」

ビシッと指差され、春輝は浮かせていた腰を椅子に落ち着かせる。

「あのでひゅねえ、春輝ひゃん！ わたひは、怒っているのれふよ！」

春輝に向けた指をブンブンと上下に振りながら、伊織はかなり怪しい呂律で叫んだ。

（怒り上戸のバターンもあるのかよ……）

思わず半笑いが漏れる。

「春輝ひゃん！ わたひが何に怒ってひるのか、わかりまふか!？」

だが、伊織が怒り心頭といった感じで吠えるので笑みは引っ返しておくことにした。

「いえ、わからないです……」

とりあえず、そのまま思っていることを返す。

「それはでふねえ、ズルいかられふ！」

返ってきたのは、よくわからない言葉だった。

（まあ、酔っぱらいの言うことだからな……）

話半分……というか、基本的に話の中身は気にしないことにする。

「ズルいって、何がズルいと思うんだい？」

とはいえ、一応話は合わせて尋ね返した。

「春輝ひゃん、ズルいれふ！」

「俺のどこがズルいんだろう？」

「だって、鼻屑してまふ！ 露華や白亜ばっかり！」

「そんなことないよ？ 俺はちゃんと、小桜さんのことも……」

「まさに、それでひゅ！」

突きつけられたままだった指に、再び力が籠もる。

「なんでわたひだけ、名字なんでふか！ 鼻屑でひゅ、鼻屑！」

「……なるほど」

意外と的を射た指摘に、春輝は思わず顔いってしまった。なんとなくこれまでの習慣で『小桜さん』と呼んできたが、確かにこれでは一人だけ扱いが違うと言われても仕方ない。案外、伊織が普段から抱えていた思いが爆発している形なのかもしれない。

「わかったよ、伊織ちゃん」

そこで、素直すなはに呼び方を変えてみた。

「それでいいのれふ！」

ムフー、と伊織は満足げな表情となる。

「……やっぱり、よくないれふ」

が、すぐに一転してまた不満そうな顔となった。

「これじゃ妹たひと同じれふ！ 今までの鼻屑分がチャラに出来てないじゃないれひゆか！ わたひだけの特別扱いをしょもーします！」

「特別扱いって、どうすれば……？」

「そんなの春輝ひゃんが考えてくらはい！」

「ええ……？」

無茶振りではあるが、これも日々不満を溜ためさせてしまったせいかと真摯しんしに考える。

「……伊織」

そして、考えた末がこの結論であった。

「これでどうだろう？ 伊織」

「むむむっ……」

尋ねると、伊織は難しい顔で固まる。

（ミスったか……？）

と、不安になる春輝だったが。

「……にへへへえ」

すぐに伊織の表情は、この上なく緩んだものとなった。

「いいじゃないれふか春輝ひゃん！ とてもいいでふよ！ 春輝ひゃんはやれば出来る子！ わたひ、知ってました！ ずっとずっと知ってました！」

「ははっ、どうも……」

予想以上の大絶賛に、春輝は微妙びみょうな笑えみを浮かべる。

「ほれじゃ春輝ひゃん！ どんどん飲んでいきまひよう！」

「いや、酒とかないし……」

「ありまふよお、ほら！」

伊織がチョコレートに手を伸のべしたので、慌たてて止めようと春輝も手を伸ばす。

「いや小桜さん、それ以上は……」

「むっ！」

しかし伊織にグッと睨にらまれ、思わず手を止めてしまった。

「違うでひよ、春輝ひゃん！」

「あー……伊織、それ以上はやめとこう？ な？」

「むふふ、それでいいのれふう」

伊織が再び満足げな顔となって、春輝はホッと息を吐く。

「あむっ……むぐむぐ……確かにこれ、美味しいれふねえ！」

だが油断した隙に、伊織が口の中にチョコレートを放り込んでしまった。

「さあ春輝ひゃん！ 夜はまだまだ長いでふよお！」

その台詞に、春輝は長丁場を覚悟した……が、しかし。

「……くう」

つい今しがたまでテンションマックスだったかに見えた伊織が、コテンと椅子にもたれかかったかと思えば寝息を立て始めた。しばらく待っても、起きそうな気配はない。

それ自体は、朗報なのだが。

「……この子が成人しても、酒の場では絶対同席しないようにしよう」

春輝は、心に固く誓った。

「春輝ひゃあん……」

そのタイミングで呼びかけられ、起こしてしまったかとギクリと顔が強張る。

「にへへへ……」

しかし伊織は目を閉じたまま、幸せそうに笑うだけだった。

起きたわけではないことに、ホッとし……それから、ふと思う。

「こうして見ると、やっぱり子供だよなあ……」

その緩んだ顔は、いつもよりずっと彼女の印象を幼く見せていた。

「君も、俺に甘えてくれていいんだぞ？」

露華にも言った言葉を、その寝顔に送る。

「……今度、起きてる時にもちゃんと伝えないとな」

とはいえ、面と向かって伝えるのは気恥ずかしいところではある。今日露華に言ったのだって、春輝なりにタイミングを図り意を決してのことだったのだ。

「そのうち、な」

結局、独り言ですら日和ってしまふ。

「とりあえず、部屋まで運ぶか……」

そして、思考を切り替えた。流石にこのまま寝かせておくわけにもいくまいと、伊織を背負って立ち上がる……と、ふにょんとした感触が背中にも伝わってきた。

(この感触……!? もしかして、付けてないのか……!?)

その柔らかくも弾力のある物体に、一気に意識が持っていかれた。

「い、いや、余計なことを考えるな……！　まだ子供だって、改めて実感したばっかだろ……！　今の俺は、この子を運搬するだけの機械……！　そう、機械になるんだ……！」  
とても子供とは思えないサイズを背中に感じながら、煩惱と戦う春輝であった。



そして、翌朝。

「おはようございます、春輝さんっ！」

キッチンに顔を出すと、伊織が笑顔で迎えてくれた。その可憐な笑みはいつもと全く変わらぬので、昨晚のことがまるで幻だったかのようだ。

「ああ。おはよう、伊織」

とはいえ幻でないことは他ならぬ春輝が一番実感しているため、そう挨拶を返す。

「……………ふえっ!？」

すると、しばらくフリーズした後に伊織が驚きの声を上げた。

「あ、あのあのあの、春輝さん、今、私のことを、何と……!？」

あわあわと動揺を見せる彼女に、春輝は状況を察する。

(記憶が飛ぶタイプか……)

どうやら今の彼女の脳内には、本当に昨晚の一件は存在していないようだ。

「あ……その、あれだ。ずっと、君だけ『小桜さん』って呼んでただろ？　でも、それ

じゃちよつと他人行儀かなって思ってたさ。呼び方を変えてみることにしたんだ」

封じられた記憶を呼び起こすこともあるまいと、今思いついたことのように話す。

「嫌なら、これまで通り……」

「いえ全然嫌ではないのでそれをお願いします是非とも！」

だいぶ被せ気味に、伊織は早口で言い切った。

「そっか。じゃあ今後は名前で呼ぶことにするよ、伊織ちゃん」

「……………あれ？」

笑顔で返すと、伊織はどこか拍子抜けしたような表情となる。

「なんだか、さつきと少し違うような……?？」

「いや、気のせいだよ伊織ちゃん。一ミリの違いもなく一緒だよ伊織ちゃん」

実は呼び捨ては結構恥ずかしかったので、これで押し切ることにした春輝であった。

「そ、そうですか……」

笑顔を微塵も崩さないままの春輝に、伊織も受け入れてくれたようである。

「ふふっ。でも、呼び方が違うだけでなんだか新鮮しんせんですね」  
それから、嬉うれしそうに笑った。

「おはよー、お姉……」

とそこで、あくび混じりの露華がキッチンに入ってくる。

「ああ、春輝クンも……っ!？」

春輝の顔を見た瞬間しゆんかん、寝ぼけ眼まなこだった露華の目がカッと見開かれた。

「は、春輝キュンも、おは、おはにや、その、おは的なアレ……」

もにもよると眩くらきながら、真っ赤に染まった顔を逸そらす。

伊織とは対照的に、どうやら露華は昨晚のことを引きずりまくっているらしい。

「うふふ、露華つばきったら。あんまり春輝はるひさんのことを避さけるような真似まねしちやだめよ？」

昨晚とは打って変わって、聖母のような笑みで伊織が露華たしなを窘こめた。

「べ、別に避けてにやーし！」

それに対して、露華が赤い顔のままにやーと吠ほえる。

「……何、この空気」

そこに現れた白亜が、入ってくるなりいつかと同じ言葉を口にした。

春輝としても、全くの同感であった。

続きは、11月20日発売のファンタジア文庫で！